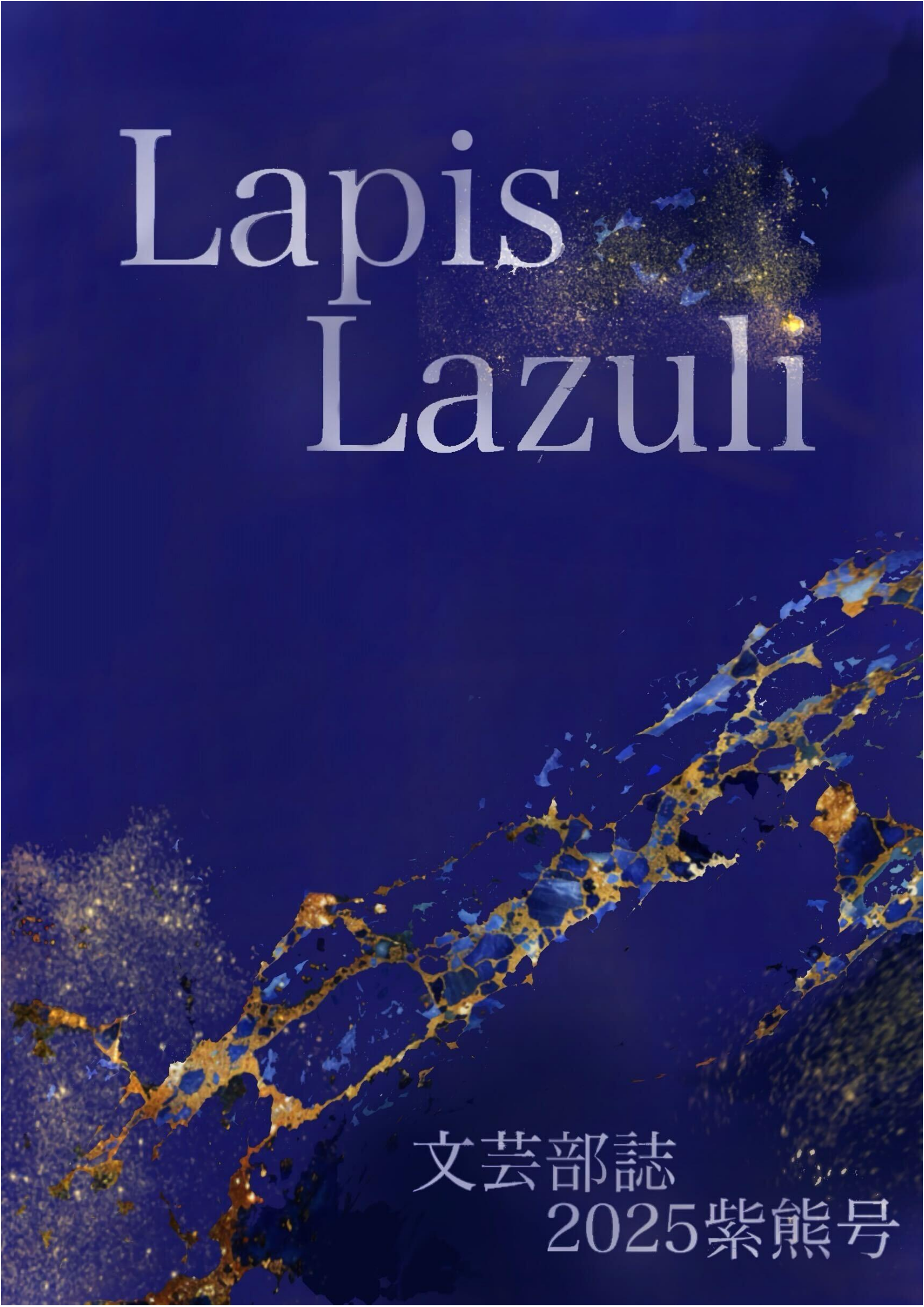


Lapis Lazuli



文芸部誌
2025紫熊号

目次

七夜	宵蘭	……三	蒸気の城のアリス	序章	
椿を喰う女	明倉有斗	……五	矮小	……二十四	
遊覧船	日々規	……九	また明日	くりや	……三十三
向こうだけが燃えている			ユズハインザダーク	ゲシユタルト崩壊	
	霧雨 蒼	……十一	長岡 雅也	……四十三	
エイリアン・いん・ザ・のつと・イージー			プラットフォーム		
・ワールド			カール	……四十九	
	日々規	……十三	日本怪異研究機関調査ファイル1…旧ど〇でもド		
氷食症	明倉有斗	……十七	アについて		
秋隣	酒匂ちひろ	……二十三	うちの先祖絶対百姓……	五十九	

断捨離日和

宵蘭

……七十

あなたの手相を見せてほしい

午睡乃

ユメ……七十一

かじかみ

午睡乃

ユメ……七十二

虎ftic Jam

犧 まい

……七十三

空

犧 まい

……七十五

あとがき

編集後記

文芸部情報

……七十六

……七十七

……七十八

七夜（表）

宵蘭

終電の一つ手前で開く傘ペトリコールに沈みて果てる

ガタゴトと煩い音のバスがいいぜんぶぜんぶ紛れてしまえ

剥がれ落つコンクリートの内側に私の意思が埋め込めたなら

谷のごと、欠けたる場所があるもので甘いナニカで蓋をしておく

天低く電線割いてあみだくじ辿りし道の果ては明星

とびつきり可愛い羊になりました君の眠りを妨げたいね

今日の月0.5倍速にして走馬灯でのラスサビにしたい

七夜(裏)

宵蘭

紅涙を描くことすら許されずいつそ椿になってみようか
笑い声聞こえぬままに草は揺れ鉄の背ばかり熱くなりゆく
棘だけを遺したままに仰ぐ茎きつと貴方は綺麗だったね
安寧をせがむ数だけ落ちる声 扇風機には首を振らせて
窓際で首を吊りたるへアゴムは縛れぬ僕を呼んで揺れをり
指先に海を育てているのです 童宮に沈む日を夢見ては
月食を迎えぬうちにサヨナラを君の輪郭欠けぬようにと



椿を喰う女

明倉有斗

私が小学二年生くらいの頃だったと思う。当時、私は父親と一緒に古い一軒家に住んでいた。

それは、ぴかぴかとしたフローリングの洋式の家ではなく、すすけた瓦屋根の家だった。引き戸の玄関、畳が敷き詰められた茶の間、板張りの廊下。今はもう見ることも珍しいほどの古い造りの家。昔びいきな父が、私が小学校に上がる前に死んでしまった母親と一緒に、わざわざこのような形の家を探したらしい。

私自身もその家をとても気に入っていた。茶の間の畳の上に寝転んだ時の、硬さの中に柔らかさがある感触が好きだった。板張りの廊下を裸足で走ると足の裏の皮膚が引っ張られる感じがするのも、何だか心地よかった。

その家の中でも、私が特にお気に入りだった場所は庭だった。けっして広いとは言えない大ききの庭だったけれど、花や草がぎっしりと生えていて、季節によって姿をがらりと変えるのが好きだった。春にはまるやかな黄色や紫色の小さな花、夏にはドクダミが生い茂った。冬になるにつれて生垣の椿がだんだんと蕾をつけていくのを見ると、どうしようもなくわくわくした。

今思い出しても、うちの生垣の椿は相当美しかった。つやつやと光沢をまとった深緑色の葉の中に、真っ赤な花びらと黄色に染まったおしべの輪郭がくっきりと浮かび上がっていた。生前の母親が丁寧に面倒を見ていたからか、咲くのはどれも大振りな花ばかりだった。母が亡くなった後、私の中で母を象徴するものの一つは、この椿になった。毎年冬に鮮やかな色の椿が咲くと、母親があつた庭に帰って来たような気持ちになったものだった。

その椿に関して、私にはどうしても忘れられない記憶がある。ある冬の日、私は小学校から帰って来て茶の間で宿題をしていた。ひらがなの練習帳のページを全て埋めてしまつて、やることが無くなった私は、畳の上にごろんと横になった。家には今みたいにスマートフォンやゲームは無かつたし、友達も皆近所には住んでいなかった。退屈だったし、その日は体育の時間にグラウンドを駆け回つたせいでひどく疲れてしまつていたのもあり、私の瞼はどんどん重くなつていった。ああ、こんなところで寝ていると父に注意されてしまうかもしれない。けれど、サラリーマンの父は会社に行っているし、仕事から戻ってくる時間はもっと先だ。お父さんが戻ってくる前に起きれば大丈夫。そう言い訳を繰り返しているうちに、私はすっかり眠りに落ちてしまつた。

畳の目の跡が頬にくつきりと刻まれるくらい眠りこけた後

で、目を覚ました。充分に寝たから起きてしまったとか、体が冷えてトイレに行きたくなったから、という理由で目が覚めたのではなかった。

何か変な音がしていたのだ。かさ、がさ、かさ、と何かが擦れるような音が、どこから響いてきていた。

何の音だろう。

紙が風で飛ばされている？ いや、それよりは虫が這うような不規則さを持った、どこかぞつとするような音だった。

音は庭の方からしているようで、私は寝起きでぼうつとしている頭で庭へと続く障子に手を伸ばした。

そつと障子を開ける。いつも通りの庭だ。冬になって茶色くかさかさに枯れてしまったドクダミや雑草が、そこらかしこに細くなって落ちている。また父と草むしりをしなければいけない。そして、立派に咲き誇っている生垣の椿。その赤色に目を、やったところで、不意に息が詰まった。

生垣の前に、誰かが立っていた。私と父のテリトリーである家の中に、庭の中に、誰かが入ってくることはそれまでに一回も無く、その事実だけで私はかなり動揺していた。

その人は女性のようだった。長い黒い髪を背中に垂らしている。線の細い体に沿わせるようにして、紺のロングコートを纏っている。それに踵の高い靴。障子に身を隠すようにしながら様子を伺っている私の方からは顔が見えない。その人の方も、

私の存在には気がついていないみたいだった。ただ、がさ、がさ、と何か音を立て続けている。

その場にへたり込みながら、女性に声をかけることもできず、私はただ手を震わせることしかできなかった。あの人は何をしているのか、もしかして泥棒じゃないか、何か危ないものを持っているいたらどうしよう。お父さん、と心の中で父を呼んだ。茶の間の中の時計を見ると、父がもうすぐ帰って来てもおかしくない時間だった。

はやく、はやく帰って来て。女の人から目を離すことができずに、私は障子に隠れ続けていた。

がさ、かさ、かさ。

不意に、音を立てながらその人が横を向いた。

青白い肌と赤い唇、冬の冷たい空気で冷えたのか、鼻の頭が赤らんでいた。

綺麗な人だった。テレビや雑誌の中に出てきそうな人だな、と一瞬恐怖を忘れる。紺色のコートの袖をまくりながら、その人が手を伸ばした。

がさ、ぐしゃつ。

音を立てて、白い手が椿の花をわし掴む。ぐつと力を込めて、根元からそれを引きちぎる。

何が起こったのか一瞬分からなかった。痛々しく裂かれた緑の茎を見て、ようやく叫びが喉の奥から込み上がりそうになっ

た。やめて、と。どうしてうちの椿にそんなひどいことをするの。けれど、その人の次の行動を見た私の喉からは、掠れた空気の音しか出なかった。

女は、ひきちぎった椿を自分の口に運んでいた。がさ、と花びらが擦れて音がする。まるでお菓子でも食べるみたいに、真っ赤な椿が女の口に消えていく。口に入れて、もぐもぐと噛んで、ごくりと飲み込む。女はその動作を何回も何回も繰り返していた。

もう体さえ震えなかった。あまりに怖いと、人は身体感覚の全てを奪われるのだと、この時初めて知った。

女が何をしているのか、いや椿を食べていることは見たら分かるのだけど、何のためにそんなことをしているのか、女は誰なのか、どうして私の家でそんなことをしているのか、全くもって分からなかった。障子の隙間から呆然と、椿が女の口に吸いこまれて行くのを見ていることしかできなかった。

怖い、怖い、怖い。目の前で行われている花を食べるという異常に、恐怖しか浮かばない。早く終われ、早く終われ、誰か助けて。

がさ、と女がいくつめかも分からない椿に手を伸ばす。

と、その時男の人の声がした。おい、という激しい声。女がその声に驚いて、ちぎった椿を取り落とす。スーツ姿の男の人が凄いい勢いで庭に入ってきた。よく見るとそれは仕事から帰っ

てきた父だった。お父さん、と一瞬安心する。

父は女と椿を交互に見やって、何が起きているのかを把握しようとしていた。女の唇に、赤い花びらが挟まっていた。それを見た父親は、何の前触れもなく、急に手を大きく振った。

バチン、と乾いた音がして、女がよろめいてバランスを崩す。父がその女の人の頬を叩いたのだった。

父は温厚な人で、暴力とは縁遠い人だと思っていた。私にも母にも手を上げたことはなかったし、テレビで格闘技の試合だとかが流れると、顔をしかめてチャンネルを替えるような人だった。けれど、女の頬に振り下ろされた手は勢いが良く、まっすぐで、力強かった。女の白い肌が次第に赤くなっていく。

出て行け、と父は言った。唾液に塗れた花卉が、女性の口から落ちた。二度と俺の前に現れるな。

俺、という言葉が父親を指すということが分かるまで、少し時間がかかった。父親がそんな一人称を使ったのは初めてだった。私の前、そして母の前では、ずっと父は自分のことを僕と呼んでいたはずだった。俺、という言葉は父親は破裂するような音で荒々しく発音した。僕、という内にこもるような響きとは似ても似つかなかった。

父親はもう一度繰り返した。出て行け。

女性は呆然となつて、何も言わないままだった。私は、女性の赤く腫れた頬、その中の一部分だけ、特に色が濃くなってい

る所があることに気がつく。父親は左利きだった。そのため、左手の薬指にはめていた結婚指輪の跡がくつきりと彼女の頬に残ってしまったているのだった。父は母が亡くなってからも、ずっとその指輪を付け続けている。

その抉れたような跡に気がついたのか、父の目が揺れた。今思えば、父親はその女性に、何をしているのか、なぜこんなことをしたのか、とは一度も訊かなかった。女性の唇や口の周りは無理に硬い葉や茎ごと椿を飲み込んだせいで、引っ掻いたような傷がたくさんできていた。かわいそう、と不意に思う。目を丸くして、頬を赤くして、口元を傷だらけにした彼女は、ものすごく弱々しく見えた。

父親は首を横に振って、ため息をついた。
帰ってくれ。

そう言つて、父親は無惨にちぎられた椿の花に目を落とし、生垣を見やった。そして、いつの間にか地面に放り出していた革の靴を拾い上げ、玄関の方へと早足で歩いて行く。彼女にはもう一瞥もくれなかった。

心臓がどきどきして、急いで障子の傍から離れる。埋めてしまったひらがなの練習帳を開いて、筆箱から鉛筆を取り出して、宿題に集中していた振りをする。私は何も見てない。何も。

引き戸が開く音がして、ただいま、と父親の声がする。父の声はいつもより少し硬かった。おかえりなさい、と応える私

の声も、いつもより少しだけ高かっただろう。

父親を迎えるために玄関に走って行く前に、開いたままの障子の隙間からそつと外を眺める。女性はもうそこにはいなかった。ただ、何枚かの赤い椿の花びらが地面に散らばっていた。

今でも街角などで椿を見ると、母やあの古い一軒家を思い出して懐かしい気持ちになるけれど、それと同時刻に、障子の奥に隠れたくなってしまう気持ちが、少しだけ、ある。



遊覧船

日々規

——今朝、久しぶりに遊覧船を見たの。久しぶりといっても前に見た時のことを覚えてるわけではないのだけれど。その遊覧船を見た時、なんとなく、久しぶり、という感じがしたの。それは単に感じたということ、だからもしかすると前に見たことなんて無かったかもしれない。もしかするとそれは、久しぶり、とは違う感覚だったのかもしれない。単に似ているだけの別の感覚、だったのかもしれない。でも、それが久しぶりという感覚では無かったとしても、今朝遊覧船を見て、私は一目でそれが遊覧船であると分かった。それは前に見たことがあるってことの証拠じゃないかと思う。だからやっぱり、前に見たことがあるんだと思う。

——遊覧船。僕には遊覧船ってものが何なのかわからない。それが船であるということしかわからない。フェリーとか、屋形船とか、そういうものと何が違うのか、もしくは何が同じなのか、そういうこともわからない。だから今遊覧船を見たとしても、それが遊覧船であるとは認識できないと思う。それが遊覧船であるかもしれないって可能性を考慮することぐらいは

できるかもしれないけど。でもそういう考慮をする必要があるとも思わない。

——その遊覧船は、工場の前の川をゆっくりと進んでいたの。真っ白に塗り上げられた船体が、日の光を反射して眩しかった。船首には旗が掲げてあって、それはどこかの国の旗であるように思えた。デッキには子供達が集まっていて、こちらに手を振っていた。私たちも手を振り返した。子供達は楽しげに何かを叫んでいた。私たちは耳を澄まして、それを聞き取ろうとした。子供達の声は脆く、こちら側に届く頃にはバラバラに崩れてしまつて、私たちはその余韻を感じるだけだった。それはとても美しい瞬間だった。私はその瞬間を覚えていようと思つたの。今後またまに思い出せるように。それなのに今はもう、薄れ始めてる。

——景色を記憶するってことが僕にはよくわからない。頭の中に景色を思い浮かべるってことが難しい。それは僕の個人的な能力不足なのか、それともみんなこの程度なのか、わからない。

——私が覚えておきたかったのは単なる景色ではなくて、不意におとづれた静けさと、わたしたちを包む言葉のかけら。そ

の瞬間を丸ごと。

—そんなことはできないよ。

—なぜ？

—それってとても自己中心的？ 人間中心的？ なんて表現すればいいかよく分からないけど、それは勝手なことだと思う。

—勝手？

—全部を覚えておくなんてできない。それは失われていく瞬間であって、保存することなんてできない。そこに美しさがある。

—そういうルサンチマンは好きになれない。全く。失われるから美しいとか。失ってしまう自分の弱さを肯定しようって姿勢。それは醜いよ。

—醜い？ 出来もしないことを追い求めるのが美しいのなら、醜さの何が悪いの？

*

遊覧船は静かに川を進んでいる。さっきまでデッキから水面を眺めていた子供達は船内に入ってしまったようで、船上に人の姿は見当たらない。一匹のカモメが飛んできて船首の手すりに留まり羽を休める。それで海が近いのだとわかる。

一人の女がデッキに出て、船首に向かう。カモメは驚いて飛び去ってしまう。女はカモメが留まっていた手すりに寄りかかる。目を閉じている。波の音を聞いているのかもしれない。女は黄色のレインコートを着ている。雨の降る気配はない。波がかかることを恐れているのだろうか。女の傍らでは旗が揺れている。

空气中に微かに潮の香りが混ざってきたようだ。まだ海は見えない。変わり映えしない景色の中を船は進んでいく。兩岸には名のわからない木々が等間隔で生えている。

気がつく女は目を開いていた。微動だにせず目の前を見つめている。海を待っているのだろうか。

潮風でベタつく肌に少しの不快感を覚える。

向こうだけが燃えている

霧雨 蒼

君が早く死んで良かった。電話で彼女の訃報を聞いた後、率直に思った。茹だるような暑さ、汗を吸った服が肌にべとりと張り付いて気持ちが悪い。風も通らず、熱気が身体中を不愉快に包み込む。受話器を置くと、ガチャリといかにもな音が響いた。壁にかけているカレンダーを見る。処暑、友引。白露が近付く。そろそろ夏もやめにしようか。障子を貫通してくる蟬の鳴き声は煩わしくて暑さに拍車をかける。

「主君、本日の予定ですが……どうかされましたか」

声のする方を見れば、近侍がこちらを見ていた。木枯しみたいな色、優しさと気品を兼ね備えた髪が毛先まで切り揃えられている。前髪から覗く丸い額はくすみの一つも見当たらず、さながら陶器だ。気遣いというものは残酷で、常からの変化を敏感に感じたのだろう。喉元から出かかった言葉をすんでのところでぐつと飲み込んだ。

——私って今、どんな顔をしてる？

「んーん、少し考え事してただけ」

自室に戻って文箱を開く。溢れんばかりに出てきた手紙は、誰がしてくれたものだったろうか、送り主ごとにまとめている。底の方、彼がくれた手紙を引っ張り出す。三通の手紙は綺麗に畳まれていて、開くとやや古っぽい、紙特有の香りがした。

——人間は嫌ですよ。いつでも勝手に死んでしまいます。

置いていかれる側のことを考えもしないで。透明な言葉が、続いて見えたような気がした。忘れていくはずではなかった。それでも、当たり前前の日常が続いていけば薄らと意識が逸れもする。死ぬのは当たり前で、生があるから死もあるし、その逆もまた然りなのだ。死んでいない状態が生であって、そこに何一つ偽りはなくて、とても単純明快だ。彼を含め、ここにいる皆はそれを知っている。分かっちゃいないのは主である私だけ、人間である、私だけ。彼等の武功のおかげで、私は今日も甘えた日々を過ごさせてもらっている。この瞬間だって死ぬこともなく。

使って使って、擦り切れて、いつか折れてしまったら、今度は私が置いていかれる側になる。消しゴムを最後まで使い切ったときに広がる達成感は、今やもう嫌悪への道標だった。彼を何度も戦場に送り込んでいるのに、片や失いたくないと思っている。無事に帰ってこれるようにお守りなんか作っちゃって、都合の良い祈りを焚べている。戦うためにいる彼は、戦場以外で生きられない。それでも、籠の鳥になってほしいと心のどこ

かで思わざるを得ない。毎日が崩れることを想像するたびに、どうしようもない不安に襲われる。足元が急激に崩れ去って、コツコツ重ねてきた積み木が一気に地に落ちる。こんなことを思う資格なんてないのだと思いつつ、それでもどうか、まだ一緒に生きていたい。死んでほしくない、と。いつまでも、と言いながら、いつまでいられるかを指折り数えて、数えていないふりをしている。

だから、彼女が早く死んで良かったと思った。だからと言って、私が死にたいというわけではないけれど。けれど、人間はいつでも勝手に死ぬ生き物だから。勝手に死ぬことを選べる生き物だから、良かったと思った。きつと置いていかれた側はたまったものじゃないだろうけれど、私がしたくても彼はどうかしてさせてくれないだろうけれど、弱さが祟ってしまった彼女の選択は尊重される、尊重されるべき、尊重されなければならぬ？　かもしれない。

壊れ物を大切にするのは良くない。貴方は貴方でしかないし、使っているうちに欠けた消しゴムの一片ではないから。頑丈でありましょう、気高くありましょう、お互いに。そうして、貴方との思い出が腐り落ちてしまう前に、果てしなく長い時間を生きることを拒み、潔く死に合いましょう。

エイリアン・いん・ザ・のつと・イージー・ワールド

日々規

振り返ると、誰にも呼ばれていなかった。てか呼ばれた気がしたわけじゃない。あれ？　じゃあなんで振り返ったんだっけ？　脳内のシナプスとかの電気信号的な何かが、右に曲がるべき所を左へ曲がり、逆流し、右往左往し、一回家に帰って、それで、汝振り返るべしっていう命令が下されたんだっけ？　宇宙人をめぐるゴタゴタに巻き込まれた後、ウィル・スミスに記憶を消されたんだっけ？　それ以外の理由もAIに頼めば数十個羅列してくれるし、特定は不可能。それが現代の病理で、原因は永遠に解明されないまま、振り返ってる私だけが未来へと取り残されていく。未来っていつてもくだらなく、タイムマシンに乗ったのび太君が見向きもせずに通り過ぎてくぐらいのやつ。それで、私は振り返ったままぼーっと突っ立ってる。振り返るっていうのも、首をひねったただけならよかったんだけど、つま先までちゃんと進行方向とは逆の方に向けてるわけ。この状態を無かったことにして、振り返り直して、再び家路を辿るっていうのは、もはや歴史修正主義的な行為ではないだろうか？　リベラルな私としては、歴史とは正しく向き合いたいわけで。それでこの場合の歴史というのは私が今しがた通って

きたこの道のことであり、私がなすべきなのは、この道をきちんと観察するということではないでしょうか？

それで観察を開始すれば、逆方向からだとか全く見覚えのない道で、夕闇の中でも光らないでいる街灯は、まだ点灯時間でないのか、それとも壊れているのか判然としない。右側に建ってる一軒家の駐車場にはホルクスワーゲンが止まっている。中学の生物の教師が青色のホルクスワーゲンに乗ってたけど、なんで私はそんなことを覚えてるんだらう？　そういえば大学のサークルにもホルクスワーゲンを持ってるやつがいた。一個上の先輩で、実家が金を持つてるとかで、ちよくちよく車の話題を持ち出してくるんだけど、自分からはホルクスワーゲンに乗ってるとは言わない。先輩の車はこのなんですか？　って聞かれて、ちよつと恥ずかしそうな顔して見せて、ホルクスワーゲンって答える。そういうのってマジで醜悪。気分が悪い。なんでこんなこと思い出さなきゃいけないのか。そもそも別に周りに注意して歩いて来たわけじゃないし、てかスマホを見てたんだから見覚えがある筈もない。そんな道に向き合う価値はないですね。そもそもリベラルな価値観っていうのは窮屈で嫌だったんだ。それで私はもう一度振り返り、振り返れという脳内の命令は正確に肉体に伝わり、歩き出す。

*

君はまた物騒な考えに取り憑かれて、一日中そのことに想いを馳せている。朝からソファの真ん中に陣取って、一步も動こうとしない。何をするでもなく、天井や床や窓の外を眺めて、小さな声でブツブツと呟きながら。それは大抵、その時々の方のJポップ。リズムなんてものは存在しなくて、ただ歌詞を平坦に空中に放り出す。音楽を聞いているところなんて見たことないのに、いつも正確に流行を把握してる。

君のそういう感じ、初めのうちは日常の裂け目って感じだった。停滞を揺るがしてくれる新鮮な異常性。でもそういうものって、しばらくすれば単なる恒例行事になってしまう。今はもう、数あるストレス源の一つではない。

そんな状態でも飯は食べる。お腹が空くところを不機嫌そうに見つめ出す。無視しても見つめ続けてくる。菓子パンとかを投げつけると、それを大人しく食べる。

君がその物騒な考えを実行に移す。その時のことを私は想像してみる。例えば私は外から帰ってきて、部屋のドアを開けて君を見つける。例えば私は朝起きて、一階に降りて君を見つける。例えば浴室で。例えばトイレで。例えば台所で。例えば私の目の前で。例えば私の知らない場所。

*

朝起きると、君は何も無かったみたいにトーストを食べている。左手でスマホを弄りながら、右手で器用にバターを塗る。

——おはよう

こちらに目を向けて、すぐにスマホに目を落とす。

——おはよう

一日で平穏が訪れるなら、初めから落ち込まないでくれと思う。そんな簡単なものじゃないとは知っているけど、でも知っているだけ。私の母親だってディープステートの存在を知っている。ワクチン会社の陰謀を知っている。知っている、なんてそんなものでしょ？

君はトーストを食べ終えて、換気扇の下でタバコを吸い始める。

——台風来るってさ

君は朗らかに知らせて来る。

——何が嬉しいの？

理解不能って感じで聞く。まあ、実際、私にも台風のワクワクってのはわかるんだけど。カタストロフが私達を解放してくれるのだ！ でもそういう感覚って、陳腐で、それを人に提示できるのって素朴だなと思う。

——なんか、全部吹き飛んだらいいじゃん？

そう。でもこういう素朴さって可愛げでもあるわけで、それを羨ましく思う。羨ましい？ 言ってみただけで、やっぱりそうでもないかも。

——いつ？

——明日の、昼くらい

——でかいの？

——でかいよ

*

朝起きると、西にはつまらん日常が鎮座しており、私は東への遁走を開始する。小雨の中、傘はささないで、見慣れた町を歩いていく。不味いパン屋と高い古着屋の前を過ぎて、品揃えの悪い本屋を横目に、ろくでもない町を歩いていく。履き潰したコンバースの靴裏はすり減り切っていて、濡れた石畳の上で私は滑って転びそうになる。とっさに体のバランスをとった右腕は変に捻じ曲がった挙手のようになる。誰もいない路上で。大袈裟に笑ってみせる。みせる相手はいない。

私は歩き続ける。車で一度通ったか通っていないか曖昧な、そういう風景を通り過ぎて、それから全く見覚えのない街並みのなかへ。



氷食症

明倉有斗

大きな音を立てそうになって、慌てて口を覆う。歯にぐっと力を入れて砕こうとしていた氷の粒を、舌の上に移動させて、体温で溶けていくのを待つ。しばらくするとそれは小さな水たまりになる。舌を動かして、それをそつと喉の奥に押しやる。ひやりとした感覚が身体の中に落ちていく。

伏せていた目でこっそり周囲を確認してみる。話は相変わらずテンポよく弾んでいるようで、私が口を隠したり、大きな音を出さないようにびくびくしたりしているのに気がついた人は誰もいないようだった。

学科の友達に誘われてやってきた飲み会だったけれど、知り合いは少ないし話にも上手くついていけない。金髪のウェーブヘア、細すぎるお腹を大胆に出している服、ピアス、ゴテゴテに飾られたスマートフォンケースに挟まれたプリクラ。女子も男子も、私よりもはるかにおしゃれで、話すことが上手で、明るく見える。居酒屋の半個室、いちばん端の席に座った私は、よく分からない話題に、へええ、とか簡単に相槌を打つことしかできない。コミュニケーション能力が高い人って、普段何を食べて生きているんだろう？

そんなことを考えていると、よ、と不意に真後ろから声をかけられる。振り向くと、そこには髪の短い女の子が立っていた。顎のラインでぷつりと切り揃えられた黒い髪、大きい輪の形のイヤリング、短い丈のTシャツにはパンクな感じの書体のアルファベットで何かがびつしりと書かれている。所々ダメージの入ったジーンズに、ゴツめのベルト。こういうファッションのジャンル、何て言うんだろう。かつこよ。けれど、その顔に見覚えはない。

「あー！ やきん、来れたんだあ」

真ん中の方の席に座っていた金髪ウェーブの子が、嬉しそうな声を上げる。やきん？ そう呼ばれたボブの女の子は、ひらひらと手を振った。

「やほー。今日は珍しくバイトなかったからね、来たよ」

金髪ウェーブ譲以外の子たちも、やきん(?)さんに親し気に声をかけている。こっち座りなよ、と真ん中辺りの席を指さされた彼女は、いや後から来たから端っこでいいわ、と迷いなく私の隣に腰を下ろした。彼女が椅子を引いた瞬間に、目が合う。

「こんにちはー」

柔らかく細められた瞳と唇に思わずどきつとする。ハイセンスな服装に身構えていた分、その表情の人懐っこさに驚いて、慌てて微笑みを返す。

「初めましてだよ、あたし美術科、3年、アキ」

「あ、うん、初めまして。文学科、3年、えり、です」

「文学科なんだ、何研究してるの？」

「えーっと、最近はフランスの小説とか、かな」

「フランス？わー、あんまり読んだことないなあ。でも、『星の王子様』好きだよ、あたし」

「え、そうなの？」

「うん、本好きなんだ。読むの遅いから、あんまり量読んないけど」

「そうなんだ。えっと、アキちゃん、は美術科だよ」

「そうそう。教育学部の美術科だから、授業のやり方とかも勉強してるよ」

アキちゃんは、私のありとあらゆる言葉を拾い返してくれる。こんなリズムよくぽんぽん会話が進むのって始めてかもしれない。話したり相槌を打ったりしてくれる度に、彼女の耳についたイヤリングがしやしやらと可愛い音を立てる。

「やきんー、何か食べる？」

他の子からそう尋ねられたアキちゃんは、最初から決めてました、と言うように、すぐにベーコンピザを一枚頼んだ。訊いてくれた子に、ありがと、と言うのを忘れずに。

テーブルにピザが運ばれてくると、アキちゃんはさっと自分の皿に二切れを取り分けて、残りを皆の方に押しやった。すぐ

に様々な方向から手が伸びてきて、ピザがかつさらわれていく。

「はい。あ、要らなかった？」

当たり前のように、自分の所にとったピザを一枚私のお皿に載せてくれた彼女は、少し首を傾げた。

「え、いいの？やきん…、アキちゃんの分じゃないの？」

「最初からえりちゃんにあげるつもりで二切れ取ったんだけど。真ん中の方行ったら、取りにくいじゃん？」

へへ、と彼女が笑う。

「あと、やきんでもアキでもどっちでもいいからね。呼び方言い間違えかけたの、ばれてる。」

「えっと、やきんってどういう意味なの？」

「夜勤勤務のやきんだよ。私バイト夜勤が多いんだよねー。だからあんまり飲み会とか参加できなくて、あだ名がやきんになった。あいつ夜勤だから、どうせ来ないぞーって」

「そういう…。ドキンちゃんとかコキンちゃんとか、そういう感じかと思った」

私のアンパンマン的勘違いに、アキちゃんはくすくすと笑った。

「今日はバイトお休みなんだ？」

「休み。駅前の夜遅くまでやってるラーメン屋で働いてるから、よかったら食べに来て。死ぬほど濃い豚骨」

「わ、いいな」

もらった。ピザを口に運ぶと、カリカリのベーコンに熱いチーズがたっぷり絡まっていた。口の中を冷やすために、水を流し込む。横目で見ると、アキちゃんも同じみたいで、少し眉間にしわを寄せてお冷の入ったコップを傾けている。浮いた氷の粒が一緒に入っていくのを見て、あ、と思う。次の瞬間、アキちゃんは少し口をもぐもぐさせて、ガリ、と大きな音を立てた。あまりに勢いの良い音だったので、他の子たちも彼女の方を見る。

「あ、ごめん。あたし氷食症なんだわ。氷ガリガリ噛んじゃうの」

「なんだ、氷か。なんか骨が砕けたのかと思ったわ」

「ごめんごめん、完全に油断してた」

そう言っただけでもないように笑い合うアキちゃんたちを見て、思わずぽかんと口を開けてしまう。私、あんなに音立てるの氣にしていたのに。あんなに思い切りよく音を立てられるアキちゃんって、すごい。

「どしたの？」

小さな声で尋ねてきた彼女に、すごいね、と思わず声が漏れる。

「私もね、あの、氷食症なの。でも、すごいそれ氣にしちゃってて。噛まないようにすごく氣をつけすぎて神経質になってるくらい。でも、アキちゃん堂々としててすごい」

「いや、行儀は悪いからあんまりしないように氣をつけてるんだけどね。貧血のサインかもしれないって記事も前見たし、褒められたもんじゃないでしょ」

首を振るアキちゃんからは、川のせせらぎみたいな音がする。しやしやら。

「……でも、えりちゃんも一緒なのちよつと嬉しいかも。うちの周り氷食べない勢ばかりでさ。知覚過敏の友達とか、めっちゃ怒られる。相性最悪」

「わ、確かに」

そこから、私はアキちゃんと謎に氷トークで盛り上がった。他の人そつちのけで。いつから氷を噛むようになったか、とか、どんな種類の氷が好きか、とか。

「ガストの氷がいちばんうまくない？（しやら）」

「あの……、細かい氷？」

「そう！ ファミレスとかの中で一番粒が細かくて噛みやすい」

「え、分かるかもしれない。たまに一気に口に入れると息できないくらい大きい氷入ってるお店あるけど、あれくらい小さなサイズだとざらざら口の中に入れられて楽しい」

「よね。（しやしやら）」

そんな会話を永久に続けていたら、氣がつけばそろそろ飲み会は解散のムードになっていて、居酒屋の前でそれぞれの方向

に向かうことになった。帰り道が私と同じ方向だったのは、なんとアキちゃんだけだった。

歩いているうちに、ぱら、と音がしたかと思うと、次の瞬間には大量の雨粒がまき散らされるようにして地面に落ちてくる。アスファルトに濃い色の点々が広がっていく。

「え、ヤバイ。降って来た？」

「わ、私の家近くだから！避難しよ！」

「ありがたすぎる、どんくらい？」

「走って五分くらい！」

「それまだそこそこあるじゃん？」

バタバタと足音を立てながら、雨の中を走る。濡れた前髪が額に変な形に張りつく感触、目の中にも、口の中にも雨粒が入ってくる。この雨粒、全部氷になればいいのに。そうしたら、全部がりがり音を立てて食べてやるのに。誰かに見られても気にしないで、雨雲から落ちて来る全部、私の歯で砕いて飲み込んでやるのに。でもそのままずっと食べ続けたら、流石に飽きちゃうかな。かき氷みたいに、甘いシロップかけて味を変えたら、いけるかな。私だけじゃなくて、アキちゃんと半分こしたら、雨雲一つ分は枯らせるだろうか。

そんな妄想も虚しくうちに、雨は水滴のままで、しばらく走っても雨は降り止まなくて、私とアキちゃんは転がり込むよ

うにして私のマンションに辿り着いた。

乾いたタオルをアキちゃんに渡す。

「シャワー使えるようにしてくるから、ちょっと待っててね。着替え、私ので良ければあるから」

「え、いやいやそこまでしてもらう訳には」

「なんで？風邪ひいちゃうよ」

きよとんとした顔で見返すと、アキちゃんは困ったように笑った。

「えりちゃんって、意外とガードゆるい？」

「え？」

「今日会ったばかりの人間、家に普通に上げて大丈夫なの？なんかあまりにも受け入れられすぎてちよつと心配になってきた」

確かに、そう言われてみればそうだ。けれど、私の心の中にはアキちゃんを警戒する気持ちなんて一ミリも湧いてこない。今日の飲み会でアキちゃんが来るまでびくびくして話に上手くついていけていなかった自分が嘘みたいだった。自分に氷の膜を張っているみたいな状態の私だったけれど、すっかりアキちゃんにそれを溶かされてしまった。

「……なんか悪いこと企んでる人は、わざわざアキちゃんみたいにそう言って危険に気づかせようと思わないと思う」

「……」

「それに、私たち氷食症メイトだし」

「メイト？」

「お仲間ってこと」

アキちゃんは少し考えて、確かに、と言って少し笑った。

二人とも代わる代わるシャワーを浴びて、洗濯機に濡れた服を放り込んだ。とんでもない時間に洗濯しちやってるけど、緊急事態だからできれば許してほしい。アキちゃんは私の薄いピンク色のTシャツとスウェットに着替えてローテーブルの所に座っていた。大学生にふさわしい狭いワンルームの部屋だから、すぐ隣にはベッドがある。柔らかい生地を身につけているアキちゃんは何だか新鮮だった。今日会ったばかりだから、ショート丈のシャツとダメージジーンズの組み合わせしか比較対象がないくせに、そんなことを思ってしまう。イヤリングはつけたままだったから、服とアンバランスでちよっとおかしい。シャワーの後だと喉が渇くかなと思い、グラスに氷と水を入れて、アキちゃんに渡す。彼女はそれを勢いよく身体の中に流し込んで、口をもごもごとさせた次に、はっとした顔で私を見た。どうしたんだろう、と私が首を捻ると、アキちゃんは私と目を合わせながら、ゆっくりと、ガリ、という音を立てた。

思わず笑い声を立てた私に、アキちゃんも微笑む。

窓にパラパラと雨粒が当たる音がまだしていて、気がつけば風も少し強くなっているみたい。ごう、という音が聞こえる。

「アキちゃん、泊まってたらずら？もう遅いし」

「え、氷食症メイトだからってそんなにお世話になるわけには」

「あはは、でもほんとに危ないから。家ってここから近い？」

「んー、歩きだったら近くはない、かも」

「じゃあ決まり、泊まっていって」

「えりちゃんって、慣れたら意外と押しが強いな」

「え、もちろん嫌じゃなかったらいいんだけど」

焦る私を見て、アキちゃんはまた川の音を立てた。

「いやじゃないよ」

ベッドを貸すという私の提案は、流石に家主にそんなことをさせるわけにはいかない、というアキちゃんの強い反対によって却下された。ベッドは私、分厚い毛布を床に敷いて、その上がアキちゃん、ということになった。ベッドに入ると、さっき雨の中で全力疾走した疲れがどっと襲ってきて、今にも目が閉じそう。

「アキちゃん、私すぐ寝ちやいそうだから電気いいタイミングで消してね。私電気つけたままでも眠れるから、いつでもだいじょうぶ」

マジで警戒心ないのね、とアキちゃんは笑う。

彼女はまだ横になつていなくて、ローテーブルの上に載った氷水入りのグラスを手で弄びながらスマホを見ていた。同じテーブルの上に、部屋の電気のリモコンを置いていたはずだ。ベッドに背を向けているアキちゃんの表情は見えない。その髪を先をぼんやりと見つめる。きっと短いスパンで美容室にいつているのだろう。真つすぐに揃った毛先が、とても綺麗だった。そういえば、美術科にいつて言つてたけれど、絵とか描くのかな。立体かも？でも、ハテナマークを声にできるほどの元気は私には残されていなかった。

次第にぼやけていく視界の中で、アキちゃんが自分の耳元に手を持つていくのが見えた。しゃらしゃらと音がする。片方のイヤリングを外して、机の上に置いている。

不意に、彼女が私の方を向かないまま呟く。小さな声だった。「えりちゃんって、私が氷食症じゃなかったらこんな私に優しくしてくれなかった？」

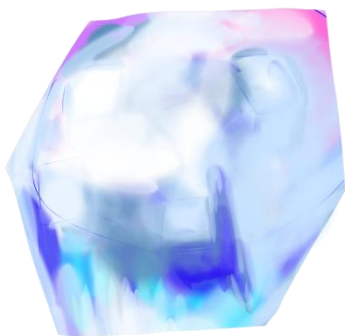
眠くて、アキちゃんが言っている言葉の意味がよく分からなかった、と思う。布団の中に入れたはずの手足が、氷を押し当てられたようにすっと冷たくなっていく。

「えりちゃん」

アキちゃんが呼ぶ私の名前、少し沈黙があつた後にもう片方のイヤリングを外して机に置く音、それが好き。もっと聞いていたくて、返事をしなかった。

寝返りを打って、アキちゃんと反対の方向を向く。身体を捻った瞬間に、うめき声みたいな声が出た。それを、暗くして、という言葉だと聞き間違えたのか、アキちゃんは少し考えた後に手を伸ばし、机の上に置いてあつた電気のリモコンを掴んだみたいだった。

部屋の明かりがふっと消える。グラスが机から離れて、また近づく音がする。彼女が私の方に近づく気配がして、私の身体の上に一層の影が落ちて、がりりと骨が砕けるような音が暗闇の中から聞こえてくる。



秋隣

酒匂ちひろ

パンプスの日焼けの跡の憎きかな

梅雨闇に食いしばる齒のつめたさや

齒車の錆溢れたる炎天下

雲の峰背負う最終面接や

真夏日や信号の影沿いて立つ

朝涼や社の裏の竹箒

地滑りの跡を挟みて麦風

ライ麦のパン頬張りて避暑地かな

かぼちや煮も冷たくされて夏料理

風死すや巨木ギリシヤの神の如

お土産の他には何も夏の果

秋澄めりチャイティーラテの水滴や

チョコアイス求るほどの残暑かな

大水に吞まれし家や藪枯らし

つくつくし歯医者その他に予定無く

秋天や学生の弾くビートルズ

蒸気の城のアリス 序章

矮小

何とはなしに見上げた、生まれた時から様子の変わらないドブ色の空が、俺に過去への夢を唆している。初めて来た極北の街、旧都市トレデリーの街並みの中でも、油臭そうな雲の群れは変わらず俺を見下ろし続けていた。

「――」

思い返してみれば、雲の正体は水だと知ったのと、神様が幻想の存在だと理解したのは、大体同じくらいの時期だった。きっかけは確か3年ほど前、稀な豪雨で作戦地域の地面が沼のごとくぬかるんだ、最悪の『仕事』の日だった。

――それもこれも、工場でもが煙を噴き上げるせいだ……！雲をこんなに増やして、カミサマの眼を潰してやがる……！

――おいガキ、まさかそれ本気で言ってるのか？

雲とは工場が昼夜問わず噴き上げる塵煙の塊で、それによって眼を汚されたカミサマが流す涙が雨。

それが、当時の俺に見えていた空のかたちだった。真実を知った今となつては馬鹿馬鹿しい妄想だと理解できるが、降り注ぐ透明な雨に対して、空はこんなにも黄土色なのだから、無理もない誤解だと思う。

「お客さん？ どうしたんですかい？ ぼーっと空なんて見て」

「ああ、いや、何でもない」

「それで、どちらまで？」

先ほど呼び止めた荷運びの老人が、荷引き馬の背を撫でながらげっそりとした声色で訪ねてくる。その声で現実に引き戻された俺は、古ぼけた荷車の座席に座り直しながら、真正面、老人の頭のいくらか上にぼんやりとそびえる尖塔の群れを指さした。

「あの、一番奥に見えるやつ。……『真北の魔女』の城まで頼みたい」

頭の上、黒煙の向こうから鈍く黄色い光がのぞく。おそらく日暮れまでにはたどり着けるだろう。老爺は特に驚いた様子もなく、馬の背を叩いて荷車を動かし始めた。

人気もまばらな旧都の街並みは数日前まで住んでいたオクトベリーのそれとはまるで異なっている。道路整備が行き届いていないのだろう、石畳の道はそこかしこがひび割れ、黒ずみ、苔むしている。顔を上げれば立ち並んだ崩れかけの尖塔が視界を遮り、レンガと鉄筋で形作られた家々はまるで道行く者を閉じ込めるがごとく入り組み、そびえたっている。それを見ているうちにうつすらと寒気を感じた俺は、羽織っていた革のコートの前面を引き締めた。

オクトベリーの仕事仲間はこの街の様子を見せれば、こんなところ
に人が住むなど信じられないと息を呑むことだろう。掃き溜め、ネズミの巣。街も生き物と同じで、死ねば浮浪者どもに集
まれるということなのだろうか。

ごとりごとり。

荷車は街を這うようにゆっくりと進んでいく。ここ最近
は街の荷車はもっぱら機械化してしまっている、このように古風な馬車に乗るとい
うのはなかなか新鮮な感覚だ。懐から取り

ライター 未満の詐欺商品

出した絡繰式煙草着火器で煙草に火を付けつつ、流れていく景色に目を向ける。
街道は蛇のように入り組んでいるにも関わらず、老人はそれほど迷うような様子も
なく淡々と馬を動かして続けている。

「あの城には、結構頻繁に訪れるのか？」

「おかしなこと聞きますねお客さん、あたしがそんな偉いご身分に見えるんですかい？」

運び屋の仕事としてどうなのかを聞いたのだが、すぐにその方向へ考えが回らない
辺り、訂正しても答えは同じということなのだろう。

政府に無許可とはいえ、魔女は土地の実質的な支配者、王とか領主のよう
なものである。そこへ向かうのだから、一目置か

れたりするものかとほんの少し期待してさえたのだが……。

「道に迷うことがないのは、あたしがこれでもこの仕事を始めて長いから。
あんたがああ城へ向かうことを意外だと思わなかったのは……あんたが傭兵だから、
ですかね」

「……へえ、わかるのか」

反射的にコートの内側に手を伸ばす。愛用のレイピアと

スナイドル

小銃から伝わる生温い金属の感触が緊張の糸を一気に引き絞る。

しかし直後、老人は俺の変化を気づいたらしく、慌てた様子で平手を顔の前で左右に振って見せる。

「いやいや、それでどうにかしようなんて気はねえですよ。ただ一目見ればわかる程度にはあんたはわかりやすい。第一、身振りの段階から血の気が多すぎるよ」

「身振りか……これでも一応気を遣ってはいるんだが」

「あたしに仕事を依頼しに来た時も、足音一つ立てないで歩いてきやがって。まるで猟犬、もしくは狼だ。それに、その外

スナイドル

套の下の小銃。洒落たハット被るようなお貴族様が野戦用の銃なんて携えるもんかよ」

「……確かに」

老人の言葉をきいているうち、なんだか説教でもされている

ような気分になってきた俺は、苦い顔のまましばらくさくなくつてきたハット帽を頭から取り外して隣に置いた。灰色の髪が生温い外気に晒されてがさがたと揺れる。

傭兵人口が急激に増加しつつある昨今、服装や振る舞いなど、いかに『傭兵に見えないか』がその一つの格を示す指標のようになっていた。傭兵という命がけの仕事をわざわざ選ぶような人間など、ほとんどは持ち金もなく育ちも悪いはぐれ者。その中で先述したような部分に気を配れるほどの余裕がある奴というのは、すなわちそれだけの報酬を得てきた実績持ちであるという証拠でもあるのだった。それに身なりを整えると、体裁を気にする貴族どもからの心象も良い。見様見真似とはいえ、この格好を始めてから結構経つし、うまくやれていると思っていたのだが……。

「……そんなにわかりやすかったかな。誰が見ても気づくと思うか？」

「鼻が良いヤツはね。あとは見慣れてるヤツ。ここ5年でそういうのはかなり増えちまいやしたからね。しかし同業相手なら実力が多少見えてた方が有利でしょう、そう気にするもんでも……」

だんだんと口の滑りが良くなってきていた老人の語りがそこで止まった。すぐ後に馬も停止する。視線を前に向けると、そこにあるのは相変わらず人一人いない街道。しかし、数年ば

かりの傭兵経験から来る勘が、鼻先にある危険を嗅ぎ取った。

「追い剥ぎか」

「4、5人つてとこですかね。普段はもう少し人気があるんであんまり出くわすことはないんですがね」

不運か。しかし俺は故合つてあまり立ち往生できない身だ。多少の危険は避けようがない。

俺はフロックコートの内側にしまっていたレイピアを抜き、すみやかに荷車から降りる。小銃を握った左手はコートの内にしまったまま。

「馬が傷つくと面倒だ。下がっておいてくれ」

「頼みますよ、お客さん」

馬車は後ろに下がり、剣を持った男が前に出る。

ここまでやれば鈍い襲撃者共も自分達の存在が気取られていることを察したらしく、建物の隙間から姿を現した。ボロのフロックコートを着た大柄な男が四人。手に持っているのはナイフに手鎌。至近距離から一斉に襲い掛かれたらひとたまりもないだろう。しかし幸いなことに飛び道具は持っていないようだ。

「おい、死にたくなきやその剣を捨てて金目の物を……」

俺はコートの内から素早く銃を抜くと、正面の男に口を向け素早く引き金を引いた。爆音とともに放たれた銃弾は狙った男の右目を貫き即死させる。血を浴びた残りの男たちは地面にべ

しやりと倒れる男を驚愕の眼で見つめる。狙った獲物が銃を携行しているとは思わなかったのか、もしくは小銃を見るのが初めてなのか。

「……………」

硬直する男たちを一瞥し、俺は銃を軽く振って薬莖を排出。次の弾丸を込めにかかる。するとようやく認識が追いついたのか、男たちが一斉に走り近づいてくる。

「やらせるな！ 殺せ！」

「いや！ まずはあの銃だ！ あれを奪い取れ！」

「首より腕だ！ 腕を落とすんだ！」

口々に叫びながら飛びかかってくる姿は見るからに焦っている。察してはいたが、やはり彼らは争いに慣れているわけではないらしい。

俺は小銃を銃口を背中側に来るよう回転させると左脇で抱え、左半身を後方にひねる。代わりに右手に携えたレイピアを前方に突き出すように構えた。腰を落とし、一カ所に狙いを定める。

左腕に抱えた銃を狙う男たちは、横一直線に迫ろうとも必ずその並びにズレが生じる。銃から最も遠い向かって右側の男。他の二人よりわずかに前に出ていたその男の喉笛めがけ剣を振り抜いた。

「ぼひゅっ……！？」

あと二人。

転倒する男の右隣をそのままの勢いで通り抜ける。振り向いた男のうち近い方に向けてレイピアを振るが、運悪く手鎌によって防がれる。

「チッ……！」

突きならそう防がれることはないが、誤って深く刺しすぎれば悠長に抜いている間に攻撃を受ける。

俺は切っ先がわずかに刺さる程度の距離感を保ち剣を振りつつ、左半身で小銃の装填作業を進めることにした。手触りだけでブリーチの場所を特定し開くと、袖の内に仕込んでいた弾薬を取り出し、銃身と腕の間を滑らせていく。装填が完了すると今度は撃鉄の場所を探り当てて引き、手首のスナップで銃身を反転させつつ肩へ引き寄せ引き金に指を置いた。

発射体制が完了したことで斬り合っていた男の意識が一瞬そちらの方へ向く。その隙を見逃さず、一気に剣を前へ突き出して男の首を貫いた。そして引き抜くことなく柄から手を離すと、最期の一人の眉間めがけて引き金を引いた。

「ぐぶっ……」

「これで全員か？」

血まみれの喉を押さえて倒れこむ男からレイピアを引き抜き、周囲を見渡す。視界内に動く物体は見当たらない。伏兵がいたとすれば既に出てきていると考えるのが自然だ。そこ2、

3人なら今更出てきたところで意味はないし、もつといたのな
ら最初から出てきていた方がずっといい。

しかし、安全を確認し、馬車の老人を呼び戻そうと後ろを振
り返った俺の耳に突如として異音が響いた。

ぶしゅうううう……

排出音。聞き覚えはある音だが、さびれた建物ばかりが立ち
並ぶこの街道においては全くの場違いな音だった。いやに不気
味な感覚を覚えながら振り返ると、街道の奥から何かがゆつく
りとこちらに近づいてくるのが見えた。

「なんだ……あれ……」

薄暗い夕方の街道の奥、やってくる「何か」の姿がだんだん
と明らかになってくる。近づいてきていたのは一人の人間。性
別はおそらく男、漆黒のハットに外套、時代遅れの嘴仮面。ベストマスクし

かしその顔は俺に比べて大分低いところにある。

なぜなら、男は車椅子に乗っていた。しかしそれは病人が乗
るような骨ばった代物ではない。巷のそれよりも二回りはでか
く、黒い鉄の装甲のようなもので全面覆われている。車輪は四
つあり、前方には巨大な槍が一つと六本の銃身を束ねた連装砲
が二門。蒸気機関で自走するのだらう、装甲の隙間からは回転
する歯車がのぞき、後方からは黒煙がとめどなく吐き出されて

いる。

現実離れた機構、おそらくこの街の魔女の産物か。ほとん
ど装甲戦車と言ってもいいその異様な姿に圧倒されていた俺
に向けて、男がくぐもつた声を響かせる。

「いい傭兵だなあ……君……」

初老くらいの男の声。しゃがれた低音はまるで地面を伝って
聞こえてくるようだ。男は手袋をした両手の指を擦り合わせな
がら、ゆつくりと車輪を転がして近づいてくる。

「殺しに慣れ、気品さえ垣間見える……。それにとても器用
だ。銃と剣を同時に操るなど……少なくとも、私は……初めて
見た」

地面の凹凸に金属の車輪が押し付けられる音が次第に大き
くなり、それに合わせて鼓動の音も大きくなっていく。

——よくわからないが、この男は危険だ……！

何故目の前の男が自分に敵対するとわかるのか、その根拠は
自分にもわからない。だが己の内側にいる何者かが、今すぐそ
の男から離れろと警笛を鳴らし続けている。

「だが……この掃き溜めに来たということは、その能ももう
じき失われてしまうのだらう……」

「哀しいことだ。空しいことだ。……なればこそ、『保存』し
なければな……。朽ちてしまう前に……」

——まずい……。明らかに日常的に殺してる奴の話し方

……！

殺し合いという異常な経験を繰り返すうち、価値観の狂う人間というのは往々にして存在する。当然これまでに似たような人間に戦場で出会ったことはあり、今の今まではそうだった彼らがどこで何をしようがどうでもいいとばかり思っていたが、いざ自分が狙われる立場になってみれば、なるほどこれだけ存在自体がはた迷惑な人間もそうはいまい。俺だけは絶対こうはならないようにしようとひとつそり心に誓う。

放射状に開かれた連装砲の射線が既に退路を塞ぎ、正面の槍が俺の身体を真っ直ぐ見据えている。隠れる場所のない細い街道。ここはすでに奴の狩場だ。左右の銃で退路を塞ぎ、高速の突進で刺殺……いや、あれだけの質量が突進してくるのだ。槍に当たらずとも挽肉は避けられないだろう。

そうこうしているうちに猶予時間が切れる。男の乗った車椅子から大量の蒸気が排出され、鋼鉄の車輪が石造りの道の上で空回って火花を散らし始める。

——来た……ッ！

真正面からの突撃。予測通り左右の砲門からは弾丸が発射される。猛烈に噴き上げられる黒煙と蒸気が、敵のシルエットを実際よりもはるかに巨大であるように感じさせる。一か八か、俺は斜め上方向に跳躍しすんでのところで攻撃を回避する。そして着地と同時にコートを翻し、自身に纏わりつく黒煙を振り

払った。

「ゲホッ……ゲホッ……」

「ほお……避けるか。期待以上だな」

払いきれなかった煙に咳き込みつつ男を見据える。高速で突進した反動で方向転換はスムーズに行えないらしく、こちらへ向き直ろうと道幅全体を使って大回りで旋回している。逃げるのなら今しかない。俺は男に背を向け全速力で走りだす。速度では敵わないだろうが、離れればそれだけ銃弾に晒される危険性は下がる。肘置きあたりに固定されたあの砲門では狙撃は不可能だろう。あわよくばそのまま撒けないかとも考えたが、方法を思いつくより先に、排気と金属摩擦を混ぜ合わせた轟音が迫ってきた。

「うぐッ！？」

咄嗟に先ほど同様斜めに跳んだ俺は、再び突進の回避には成功したものの、立ち位置が悪く建物の壁に取り付けられた鉄筋で脇腹を強打してしまう。痛みから着地に失敗し地面に転がる俺の耳に、男の声が降り注ぐ。

「また避けたな。しかしあと何回同じことができる？ 言うておくが、ここで私に動力切れはないぞ？」

そう言うと、男は自らの足元、建物の隙間から伸びていた管のようなものを手に取り、車椅子の横に繋ぐ。どくどくと音を鳴らしながら、車椅子の動力機構に水が充填されていく。

——マジか。確かにその大きさじゃボイラーの水は何秒ともたないとは思っていたが……。

よく見れば今男がいる場所だけではない。周辺の建物の間、様々な場所から同様の管が道端へ伸びているのが確認できた。水を使い切らせるのは勿論、管一つ一つを破壊して回るのも得策ではない。

「諦めたまえ。君、もう詰んでいるよ」

痛む身体に鞭を打ち立ち上がった俺の眼前に、12の銃口が同時に突きつけられる。

逃走は困難。撃退は不可能。停戦などもつてのほか。絶望的な状況の中で、けれど俺は降参とか諦めなんてものはまっぴらだった。

——銃はどうだ？ ……ダメだ。ヤツの身体に届かせるには障害物が多すぎる。接近戦……旋回の時間を狙えばあるいは……いや、急いで走ってもおそらく間に合わない。そもそも次の弾幕をどう躲す？ 考えろ……他に策は……！

引き金が引かれるまでの幾ばくも無い時間、走馬灯のように思考が巡る。しかし所詮は悪足掻き。現実逃避以外の意味を為すことはなく、最期の瞬間は無情にも過ぎていく。

——ダメだ……！ もう時間が……！ 死——

しかし、いよいよ死が確定するかと思われた次の瞬間、鋼鉄の怪物は突如として『爆発した』。

「なッ……!?!」

状況を理解する暇もなく、俺の身体は爆風によって後方へ吹き飛ばされる。前後不覚になりながらも、俺は身体を丸めて頭を守り、何とか無事に着地する。顔を上げると、先程まで自分達が立っていた辺りには巨大な窪みができていた。その中心にあったのは、乗っていた車椅子が跡形もなくひしゃげ、上半身の四散した嘴仮面の男。破損の仕方から見ると、それは内側から爆発したのではなく、外側からの強い衝撃があつたらしかった。

「大砲か何かか……？ それにしてもどこから……」

凄まじい破碎音から来る耳鳴りも消え、静まり返った辺りを見回す。すると上の方、家屋の屋根を照らす白い円状の光が目に入った。灯台の灯りのような強い光。その光源に目を向けると、その先は聖堂のような巨大な建物の屋根の上。逆光ではつきりとは見えないが、そこに立つ不可解なシルエットが確かに確認できた。

「……人、か？」

頭の位置から光を放つ、四肢を持ったナニカ。しかし、屋根と比較してもその姿は明らかに大きすぎた。全高は一般的な家屋の二階分、いやもっとあるかもしれない。

いくら謎多き魔女の領地とはいえ巨人なんて胡乱な存在あるわけがない。あれこれと思考を巡らせているうちに、その影

は聖堂の屋根の後ろへ姿を消してしまう。俺はそれがいた方向へ走り出す。都合のいいことに聖堂の先には目的地、真北の魔女の城がある。打撲であちこち軋む身体を奮い立たせ、荘厳な聖堂——よく見るとそれは既に廃墟になっているらしかった——の前を通り過ぎる。最後の曲がり角を抜けると既に巨人の姿は跡形もなかった。しかしその代わりに、ようやく目の前に目的とする城の全容が姿を現した。

「何だ……これは……！」

城そのものは、それまでに何度か見る機会があった。そのほとんどは堅牢な石造りの城塞。しかし今日の前に広がっているものは何もかもが違っていた。先ほどの聖堂にも似た、細やかな装飾が施された複雑な壁面の造形と立ち並ぶ尖塔。移民文化に根差した一昔前の建築様式だったか。なんにせよ、城に用いられる例は少ないものはずだ。

ここまではいい。しかし問題はその材質である。全て金属だ。いや、正確には全てではないのだろう。ステンドグラスを始め城にはいくらかの色のグラデーションが見て取れる。しかしその大部分は黒く塗られた金属でできていた。排気で濁る空、廃墟まみれの旧都市、そしてその最奥に構える漆黒の城。まさしく魔女の根城といった感じだ。そして何故金属にする必要があったのかも外観からすぐに判断がついた。

「蒸気機関……城全体がそうなのか……？」

尖塔の間から立ち上る黒煙と、壁の隙間のそこかしこから見える歯車たち。さながら時計仕掛けの超巨大版と言ったところか。城全体を機械のパーツにするのだから確かに材質は金属以外ありえない。しかしそれだけ巨大な機構を作って一体何をしているというのか。その正体が危険なものである可能性も十分にあるだろう。

「……でも、俺にはもう他に行き場がない」

求人票

煙草に火をつけ、ポケットに入れていた招待状を取り出す。それは今は亡きオクトベリーの友人から譲り受けた、最後の寄る辺とも言えるものだった。優秀な傭兵を求めるその求人は、目もくらむ高給をちらつかせる代わりに、業務内容の一切が秘匿されていた。

しかし、眼前の魔境こそが、金も仲間も失った俺にとっての最後の希望。

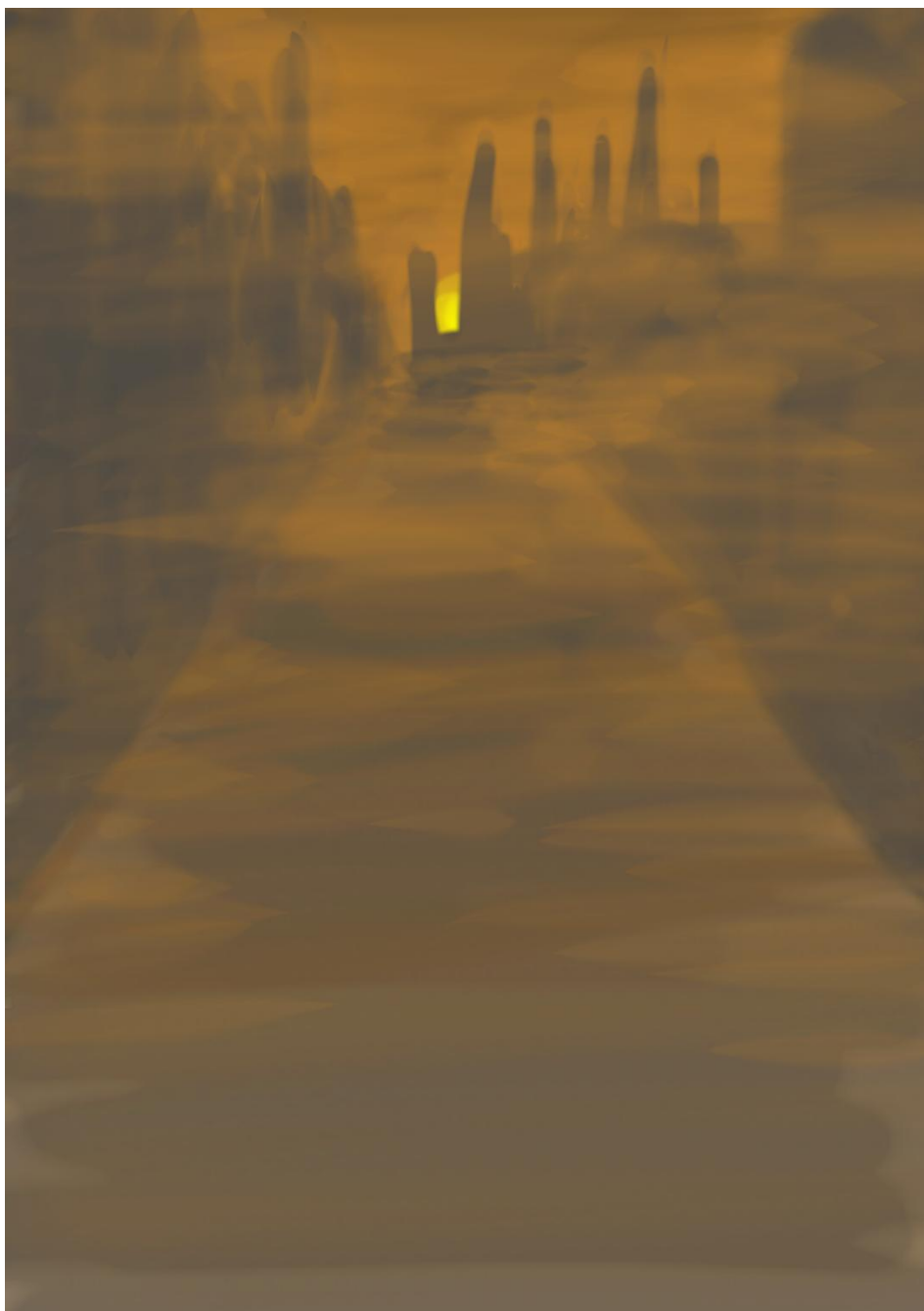
俺は胸いっぱい煙草の煙を吸い込むと、ゆっくりと吐き出す。腹の奥にたまっていた膿のような不安が押し流されていくような感覚。最後の一息を吐き終わった時、俺の心から迷いは消え失せていた。

「……行くか」

落とした煙草を踏みつけると、俺は眼前の城へと歩き出した。ぎりぎりまで沈んだ黄土色の夕日が、煙る建物のシルエットを

くつきりと浮かびあがらせていた。

(続く)



また明日

くりや

いつかの夢

「あんた、そんなんじゃないやあダメですよ。努力、もつと努力しないと。社会はあんたが思ってるよりずっと大変なところなんですから。今の調子で生きていけませんよ。自分がどれほど恵まれた幸せ者か自覚しないと、このままぬるま湯に甘んじてるんじゃない人間失格ですよ」

後輩の説教は私を不思議な心地にさせた。何かを思うでもない。心は動かず、普段の位置にじっとしたままにいる。それでいて、自分の中身がなんであるか瞭然としない感覚が水月の辺りに滞留していた。こんないつもの通りの、今更な日常を思みぞおちい出していた。

夜明けの章

自分よりも他人の機微が気になる子どもだった。それは思い遣りよりも恐れに近い位置から芽生えた関心だった気もするが、私には分らない。

そも私には思い遣りと恐怖の区別が分らない。信仰と思考停止が表裏で一体であるように、他人を悦ばせる行為、それをポジティブに言えば思い遣り、ネガティブに言えば対人恐怖と言うのだと認識していた。

どうやら皆はそうではないらしいと気づいたのは、人間は案外思い遣る相手というのはどうでも良く、自分が「優しい」をしたと主観の事実のみが重要なのであって、それで満足のようだと観察した時であった。すなわち世界は個人の内側で完結している、こじんまりとしたものと発見して、私は何かに期待して希望を持つ、ということをしなくなった。

そうすると私には幸福というものが分らないようだった。他人は笑顔の私を指して幸せ者という。しかし振り返り見れば私の人生を支配したのは常に恐怖と焦り、そして怯えだ。

いつも目の前の誰かの顔色を伺って、脂汗の滲むサアビスをして、おどけて、笑わせようと必死だった。笑って貰えて、そして初めてホッとする。

この「ホッとする」は決して幸福を意味しない。これはつまり、鼻先に突きつけられた刀を一旦引いてもらえた、そういう安堵だ。しかし他人というやつはいつなんどき、何を引き金にまた

刀を振り翳して斬りかかるか分からない。

私は他人の存在に常に恐怖し、己の無害と無実を懸命にアピールして、自ずから相手の下位に謙ることと他人様のプライドを満足させて生き延びる道を選んだ。

精神的情婦。私と会えば他人は猛々しく聳え立った自尊心を取り出し、生臭いブツを鼻先に突き付けてくる。屹立した欲の塊の前に私は跪いて、恋人に愛をささやくかのように顔を寄せ、犬のような健気を装って舐めまわし、媚び、へつらい、奉仕し、慰める。

「自分は貴方様を気持ちよくできる有用な道具です、ですからどうか可愛がって下さい。」

その手練手管を磨くことが私なりの生存戦略だった。かしこさ

こんな生き方をしてきて、こんな生き方しかできない私に、いよいよ今宵限界が来たのだ。私は死のうと思つてアパートの八階まで上がってきた。封鎖された屋上と八階を結ぶ外階段から飛び降りようとした。階段は胸ほどの高さの壁に囲われ、外界と隔てられていた。その分厚い壁に片足を乗せたところで、私は突如として動けなくなつてしまった。大股開きの間抜けな格好のまま、眼下の黒々としたアスファルトを眺めながら、ここまでの思考の旅を遙々してきたのである。

怖気づいた、と軽蔑してしまえばそれまでののだが、理屈と

してエネルギーが私には無かった。嫌なことを乗り越えるエネルギーが無いから死にたいのに、自分を殺せるはずもなかった。しかし死なねば明日がまた始まつてしまう。死ぬべきだ。無間地獄にはもう一日も耐えられない。だからもう終わろう——私は不意に足を引つ込めた。下の道路を一台のトラックが走つていった。人目を恐れたのだ。今まさに死のうとしている人間が、他人を騒がせるのを恐れて足を階段の中に入れてしまった。

いよいよ絶望した。もう脳を稼働する力さえなく、その場に座り込んでいた。気持ち悪さに苛まれて吐き気がした。憎しみとやるせなさど殺意と悲しみとがないまぜの表記のない感情が暴れ狂つて、胸を突き破つて死んでしまいそうなほどだった。殺してほしかった。全身が火の手に包まれているような、存在が焼けて爛れていくような、端から細かい虫に齧られてバラバラにされていくような、責苦痛苦の一切合切が身中にあつた。——気が遠くなるような膨大な時間が過ぎた。少なくとも私にはそう感じられた。

「つかれた」

すでに青くなつた空にぼそりと吐いて、一步目を踏んだ。

深夜の章

私の狭い部屋はすっかり酒気と、陽気臭い騒がしさに呑み込まれていた。

「恋はいいぞ。夜はぐっすり眠り朝は爽快つてな。日々が幸せの洪水で、活力が漲って何だつて頑張れる。お前たちにも早くそうなつてほしいよ」

先輩の恋愛自慢から始まって、バイト自慢、モテ自慢、筋肉自慢とめいめいの誇りと努力の対象が次々に話題の壇上に登った。どうやら健全な人々は、他者を愛し、金を愛し、評価を愛し、自分を愛しているらしかった。

皆の注意が先輩の見せびらかす腹筋に吸われ、誰も自分を見ていないのを確認し、一人静かに安くて不味い酒を味も感じない内に飲み下していた。スマホを弄るわけにもいかず、なんだか煙草を吸いたいような気分にもなつて、指を二本立てて唇に当てては呼吸だけ繰り返していた。そんなことをしでかす以上、確かに私も酔っているらしかった。

「おおい、お前は何かないのかあ？ お前が女に狂ったら、さぞ見物なんだがなあ」

先輩に矛先を向けられ、自分の態度がバレて気を遣わせたかと勘繰ったが、どうやらその様子もなく、ただ後輩の腹筋に飽きただけようだった。

「いやあどうも、ベッドと学校の往復でやつとで、面白い波瀾

の一つもない生活ですよ俺は。何か事件の一つや二つ、あればいいんですがね」

私はだんだんと禍いのかたまりがにじり寄ってくるのを予感していた。さらにツキの悪いことに、話題がこの禍いから遠ざかるのを期待して忍耐を発揮していたというのに、「私が恋人を得るとしたらどんなものか」という談義が開始されてしまったのだ。

こうなつたらもう無駄だ。人間の、「誰かの役に立ちたい」という腐臭の本能欲求は自省のブレーキがないがゆえに最大の厄介者で、諸人を快樂の奴隷にしてしまう。私はその蒙昧なる儀式の生贄に選ばれてしまった。

救えない。禍いが蓄積されるのと他人に構って頂く悦びと、二つ、私の内にあった。

「オレ達でこいつの服を買いに行こう」

「もつと自信と余裕のある大人の男になろう」

「遅刻癖や自堕落生活を改めて自律の雰囲気を持つとう」

「筋トレを通じてテストステロンと規則正しい生活を——」

馬鹿馬鹿しかった。やるせなかった。泣きたい気さえた。努力や向上など、世間で支持を集める彼らの響きは私の心に少しの感銘も与えないばかりか、失笑に転ずるのだ。意志薄弱がゆえに情婦みたくして、力なく跪いてようやく生きているのに、どうして努力にエネルギーを割く余裕があるだろう。世間はこ

の態度を甘え、怠惰と非難する。誰からも、理解を得られた試しはない。

私の惚れそうな女のタイプについて議論が白熱し始め、また誰も私を見ていないことを確認して、私は残りのアブサンを飲み干した。

祭りの後に残されたのは空の瓶缶、べたつく床、食べ残されたお菓子、コンビニ弁当のカラ、ケミカルな甘い臭いが染み付いたクッション、少しでも標高を増した使用済み食器、それにトイレを吐瀉物で汚していびきをかく大虎が一人という状態だった。そして今日もこれから学校と、放課後は部活、夜にはバイト、更には課題の締め切りまでもが待ち構えているのだった。分かっていた現実が鎌首をもたげる。とても、とても吊りあわない。

もう嫌になった。逃げるように縋るように茹だるように、胸を掻き毟り、頭を掻き乱し、甲虫の歯がぎちぎちと耳元で騒ぎ出して、固形の冷たい業火が全身で暴れ狂って、禍いのかたまりがいよいよ芽吹くのを直感した。

ここは三階。玄関の扉を見据えた。暗い廊下の果てにそれはあり、口の端から吐瀉物を垂らした男がその中腹で寝ていた。この試みが徒労に終わることは、経験から知っていた。

ひとまず何も考え「努力」ず足を動かしてみた。トイレから

廊下にはみ出している男の頭の前で足が止まった。かの後輩のように、甲斐甲斐しく口元を拭ってやろうとは微塵も思わな「もつと努力」い。しかしこれを跨いで行くこともできない。踏み潰してやろうという気は、少し湧いた。

しばらく大恩ある先輩の顔面を見下ろして立ち尽「世間は許してくれませんよ」くしていたが、例によってもうエネルギーを使い果たし、何をしようという気力が全部無くな「この先、社会」って、ベッドに寝転ぶ外、何もなかった。「生きていけませんよ」うるせえ。私は外に飛び出した。

宵の章

「先輩は彼女つくらないんですか？」

「おいおいそりや、煽りか？俺がモテないの知ってて言ってるんだろ、なあ？まったく、ひでえ後輩だ」

軽口を叩いて鍵をポケットから取り出し、そもそも鍵をかけていなかったことを思い出して、そのままドアを開けた。

「どうぞいらっしやいませ。汚い部屋で申し訳ないね」

「そんなの今更ですよ。僕が何回あんたの家に来たと思ってるんですか」

今夜は私の家に人を集めて飲もうということになっていた。

傍から見れば私は、誰かと遊んでまわるのに積極的なお祭り人間、ということになっているらしかった。しかしその実は、絶えず水をやらねば乾いてひび割れを起こす土地をギリギリ保たせるための、泳ぎ続けるマグロのような命がけの死活問題であつた。

ある人にとつてのニコチンや酒が、私には忘我の馬鹿騒ぎであるという、ただそれだけだつた。本当に何もせずに済むのならそれが良いと、常々心から思うのだった。

他人が飲み食いできる程度には取り繕つた後なのだが、後輩は私の部屋の有様を見るなり片づけを始めた。そのために私も疲れをおして労働せざるを得なくなつた。

「悪いねこんなことまでしてもらつちやつて。お客さんなんだから楽にしてもいいんだぜ？」

「いいですよ別に、僕が好きでやつてるんで」

やはり、いつもの通り。遅れに遅れ、遅きに失して、過ぎ去つた自分を遠く顧みては「ああ、こいつ、またやつた」とただ罪深い所業を思い返す。

人間という獣は、誰かの役に立つ、その快楽を喰らうのである。人の間に生きようと望むなら、その習性を見透かす技能は自然と、幼心の内に会得された。

この場合、^{わざ}態と恩を買う。すると、ありがとう、ごめんねが

彼らのような善人には何よりの報酬となり、皆、花の綻ぶ如くの笑顔をみせるのである。それが一人で生き抜く力もない薄弱的な私の、蛆より卑劣な虫ケラが自然でそうするような、人間社会に生存するための戦略だつた。

これが私が人生の大半をかけて磨いた技術であり、酷い悪癖であつたが、なにより罪深いのは「こいつまたやつた」の追憶において毛ほどの気持ちもない、人でなしの薄情だろうと私は推察していた。この秘密が暴かれた日には周囲の失望と怒りによつて殺されると私は信じていた。しかしその日を恐怖して待つ、という訳でもどうやらないのだった。

「先輩、あんたこんなじゃあダメですよ。もっと頑張らないと、彼女もできませんよ」

「いやあ昔は何よりも欲しかったがね、今はつくるための努力も、付き合つてからの努力も気が向かないから、しばらくは遠慮しておこうと思うよ」

私は後輩の醸し出す空気を読み取り、同じ空気を纏つていたあの日を思い出していた。「今から踏み込むぞ」という空気。

体内に例の鉛の質量をもつた不思議な靄が滞留する感じがあつて、それがちよつとばかり不味いような雰囲気があり、そういう確かな警鐘もあるにはあつたのだが……私の機微の、自分に割く分は常に売り切れのため、その辺、逆に他人事の鈍感さであつた。

「あんたこの程度の努力もできないで何を言ってるんですか。ただ怠惰なだけでしょ。いいですか、僕は心配なんです。あんたがこの期に及んでそんな調子だから、ちゃんと物事を考えているのかって。働きもしない、学校もサボりがちで、何かに打ち込むでもなくて、いったい、それじゃあ何をするんですか。そんなんでこの先、将来、やっていけるとでも思ってるんですか。僕たちは許しても、世間は許してくれませんよ。どうです、先のために資格の勉強でもしたらどうですか。」

「いやあ、さすがに、それはちょっと……」

「じゃあどう考えているんですか。モラトリアムももうすぐ終わるでしょう。もうあと次の季節には就活ですよ」

「いや、これでも自分のことについてはずっと、呆れるほど考えてるんだぜ？ 俺のような人間に、サラリーマンになって人並の幸せとか、土台無理なんだよ。向いてないんだ。それが良い事と、そうなりたいと思えないんだから」

「それじゃ将来どうするんです。」

「作家になる。」

思い切って、そう言った。ずっと温めていたことだった。

「――」

絶句。
どうやら間違えたらしいことは痛いほど、実際心の臓の身体的な痛苦さえ生じて、理解せられた。私は間違えたことは言わ

なかった。しかし、間違えているとするなら、それは最初の最初から何もかもがもう間違いで、全部壊してしまいたい、そういう気分だった。

後輩はようやくショックから戻ってきて、しばらく次の言葉を慎重に考えてのち、口を開いた。

「じゃあ、もっと努力しなさいよ。あれは天才が努力して、ようやく一握りが許される世界でしょう。夢を否定はしませんけど、それならもっと朝も昼も夜も寝食惜しんで努力して、飲み会みたいな遊びもやめて、全霊で努力しないとダメでしょう。この先、社会はあんたが思っているよりずっと厳しいのだから、今の調子では通用しませんよ。努力しないと、社会では生きていけませんよ」

「死ねばいいじゃないか」

私はそう言った。言い終わってから、ああ、憎悪だったのかとついに自覚した。曇り硝子の向こうみたく瞭然としなかった自らの中身、それは正義に楯突く悪人の罪深い魂に相違なかった。悪癖によってひた隠しにされていた魂は、水月から全身全霊を埋め尽くすほどに堆積した憎悪で今、私を超えて零れ落ちた。

俺はニヤニヤと汚く笑っていた。

「それは――傲慢だ。」後輩が言った。

「悲しむ人も大勢いるでしょうに、自分の死んだ後のことも考

えないで、自分さえ好ければいいなんて、酷く身勝手に、傲慢だ。」

「――」

何を言っているのだ、こいつは。人間にそれ以外があるのか。それ以上があるものか。みんな自分さえ好ければ、いいんじゃないか。その性質のために俺はおまえたちに媚びてきたんじゃないか。親が、友が、誰もかもがこの技術で笑ったじゃないか。俺の、気も知らず――

昼の章

珍しく四階教室の授業だった。私は窓を見ていた。

世界が個人の心を汲み取ってなどくれるものか、とその類の小説描写に反抗的な持論を一人密かに、誰にも漏らさず秘めていたのだが、今日に限っては実に見事、気持良くくらいに重苦しく陰惨な不愉快な空だった。

ここは四階。くすみ曇る向こう側に、何も面白いもの、心震わすものはない。遠くでぐわんぐわん揺れるヤシと、さらに遠くの面白くもない異郷の街並み、薄墨をぶちまけたような世界を切り裂く無数の水滴が時たま映り込み、その程度だった。

ここは四階。この尻は力学の何によるものか、ぴっちり椅子

の座面に張り付いたままだ。それでも決して届くことのない向こう側の世界、くだらない妄想と分かっていて、私の目線は囚われていた。ここは四階、ここは四階……

パチパチパチパチ！ いきなり弾けた拍手が意識をこちら側に強制する。見れば課題の発表が終わって、女子生徒が一人席に戻ろうとしているところだった。優しい声音を發して先生が、「誰か感想や質問など發表してくれる方はいませんか」と毎度お決まりの台詞を我々に向けた。

当然、日本人の悪癖で誰も手を挙げることはなく、静寂が秒針を進める。こういう時、私は『どうしようもなさ』に襲われ苛まれるのが常だった。

何度も繰り返した逡巡。ほとほと、呆れはもうそろ品切れといった頃合い。走光性の虫のように先生に忖えなくなる自分と、それを馬鹿、と吐き捨てる私。どうせこの尻の引力に逆らうことなどこの俺にできようはずもないだろう。もとを辿ればだ、幽かなこの手を挙げてやりたい衝動も、強大な引力と同質のエネルギーであるというのに。

決して清教徒的に己の世界に対する無力を嘆いたのではない。むしろ真逆、己の学習しない愚かさ加減に絶望したのだ。何度も反復繰り返しの果てにコントロールを掴むことを学習と言うが、私は未だ二十年の付き合いになる『自分』のコントロールが叶わずにいる。意のまま身体の如く一致するのは果た

して、いつの日か。

ここまでの感傷が言葉になる前の泡沫として目の前を通り過ぎていく間、私の脳が浮かびあがっていく泡沫に気を取られた思考の一瞬の空白に、気づけば俺は、資料に目を通し終わ得意見・感想を述べる準備を十全に済ませてしまふ離れ業をやつてのけていた。

途端、今朝の気持ち悪さが帰ってきた。胸の内を焼いて、暴れて、不快感が渦巻いている。固形の冷たい業火、これが『隣人が背負ったら命取りになる禍いのかたまり』なんじゃないのか。久しく忘れていた吐き気を抑えて、懐かしい苦悶との再会を噛み締めた。

結局、何もかも壊してしまいたい衝動は、四方八方大人しく座る生徒も、私にさえ情をくれる愛すべき先生も、曇り窓も、校舎も、街並も、天も、規律も、法則も、当然自分も、何も壊すことなく、尻の重さに負けて鐘を迎えたのだった。

朝の章

瞼の裏に夢か妄想かの間くらい映像が投射され、その泥濘ぬかるみから我に返ってからは、もう限界だった。数時間前、目を閉じる試みを始めてからずっと、死んだ子鹿が山中で静かに腐爛し

ていくような、そういった臭気が刻一刻と脳の深みに堆積してきていた。これを無視し続けるには、睡眠はどうに価値を失っていた。

うざったいイヤホンを耳孔から引き千切り、役立たずのアイマスクを額に押しやって、天井の色を確認するとやはり、絶望の色に染まっていた。

絶望とは、仄暗い青色をしている。

私が全力で閉め切ったカーテンの、その無情な隙間から、夜明けは部屋を侵してくる。私のような人間にとって、この青は絶望の象徴にほかならなかった。

ベッドの上に投げ出されたイヤホンから、安眠用音声が薄く空気中に混じって漂い、それがまた、嫌に癪に障る。日の沈む内でさえあれば、ひび割れの大地に注ぐ慈雨のように私を穏やかにさせたそれが、今は絶望に付随し、むしろ掻き立てる存在へと一転牙を剥くのだ。

私は八つ当たりをしたくなかった。この機器を叩き壊し踏み潰し、中身の鉄クズを暴き、晒し、一切合切台無しにしてやりたという気分が襲われた。果たして、私が一時の感情に自身を任せられる自由さえ持ち合わせていれば、私の人生にはまだ救いがあつて、幸福の芽があつて、こうも暗闇を無理に歩くような真似をせずとも良かったものを。

残念ながら、この魂は透明な木組みの枠に押し込められた窮

屈さを、悲しい性質として抱えていた。鵜養の河鵜がよく似ていた。船に繋がれて飛べず、喉輪をつけられ魚が喰えず、人に利用され、しかしそれで、人に餌を恵んでもらう。その生は人の所有で、自分の価値は人の尺度によって定められる。——いや、それも馬鹿げた被害妄想に過ぎない。

青天井の絶望をただ見上げる。人間は感情の乗り物である。人間のハンドルを握るのは感情である。現状の私には、人が活動する元手となる、意思のエネルギーが底を尽いていた。そのため四肢はピクリとも、そうさせようともまず思えず、私は次々訴えられる悲痛な信号をただ感受する肉の人形と化していた。

臓腑を掻き毟りたい気持ち悪さが胸のあたりで焼けて、爛れている。喉から出てはいけない何かが出かかっているが、それを押し留める何者かのせいで吐き出せもしないでぐるぐるしている。精神を虫食む甲虫のギチギチ音も近寄ってきて大きく聴こえだす。胃の腑のムカムカもまた火の手を強めてより苦しめる。

私はもうずっと、このままで居たいという気分だった。しかしガソリンはなくともブレーキやエアバッグは生きているらしく、眼球がぎよろりと時計に引き寄せられた。

このままだと死んでしまう。人間として社会動物として死ん

でしまう。システム生存本能に抵抗するエネルギーもまた、私には無いのだった。

私の自堕落はきつと物心以後の獲得ではなく、魂の原初部分から遠からずに刻まれた形質に違いない。そこはまあ人並みのことであろうと思う。しかし「自分なる現実への不真面目」に助長されているのは、それはちよつと不味かった。

私は何度も命取りの事態に見舞われ、または予見された。しかし私にとって、過去や未来なるものはどうあってもページの向こうの物語にしか感じられず、人間というのは、どうしても良い事に対してどこまでも無愛想で居られるのだと習性を痛感するのが常だった。

然して、治す治さないの叱責の際には、その次元にさえないな私にできることと言えば、しおらしげな愛想笑いをくりだすことだけだった。

耳元で騒ぐコバエの羽音もはや聞き慣れた。テーブルの上の変色したサラダに蛆が湧いている。廊下の隅にまたハエの卵だか蛹だかがうじゃうじゃ落ちていたなと視界の端を思い出す。

何か食べたかったが、冷蔵庫には腐って液状化した野菜や奥の方で存在を忘れられた卵しかなかった。ちらと目線をやると、流し台は排水溝が詰まり、食器は冰山のように、色のついた水

の中に半分沈んでいた。フライパンなどもあの中で溺死しているのだろう。

下着が足りなかったので生乾きを洗濯機の中から引っぱり出した。鍵は前日の抜け殻の尻ポケットにあった。肩をどこかにぶつけながら、玄関をくぐる。鍵をかける手間は惜しんで、日の下を、吐き気を嘔み潰して、ゆうっくりと歩きだす。

ふと、自分の指先に蛆がくっついてきているのを見た。蠕動して生を求める物体をほんのひと瞬きほど眺め、それを口に含み飲み込んだ。

ユズハインザダーク ゲシユタルト崩壊

長岡 雅也

本名は■■■■、身長は一七〇と少し、今は福岡の大学でバスケ部のマネージャーをしている、らしい。これが■■■■の基本的なプロフィールであり、僕が彼女について知っていることのほとんどすべてである。

これから■■■■周辺の事柄について語るとき、このように何度もその名前を綴ることは面倒で、気が引ける。更に言えば、ほかふたつの理由から僕は彼女の名前をあまり呼びたくない。ひとつめに僕のこころの問題がある。ある時期を境に、僕が彼女に不用意に接近しすぎるととてもない吐き気を催すようになってしまった。接近というのはもちろん物理的距離の意も含むが、それよりも精神的距離の意が強い。そして精神的に接近する、というのは大抵の場合、僕が彼女についてよく考える、ということではない。僕の知りうる範囲において彼女と僕が仲良くなった感じがしたのは、出会って（僕が彼女を認知して）ひと月程度の話だ。だから一般に想像される精神的距離は少なくともここ二年は変動していないことになる。あくまで僕が■■■■に対して感じる、という極めて一方的なニュアンスの枕詞を伴うものだとご理解いただきたい。ともかく、写真

を長々と眺めてみたり、彼女について黙々と考えてみたりと、むやみやたらと■■■■と戯れることは僕に多大な苦痛をもたらす。こういうテキストを残す以上後者を避けては通れないが、それでも抗せるところは抗しておきたい。磨ガラスを通してものを見るようにして、陽炎の向こうの人に呼びかけるようにして彼女について語りたい。これが理由のひとつめである。ふたつめには区別の都合がある。

僕がこれから語るのには■■■■という実部（らしきもの）についてのみならず、その周辺に漂う虚部（同文）を含めたものだ。そして、その実部について僕は大部分を記述し終えてしまった。これから語るのには『僕にとっての』■■■■でしかなく、ゆえにそれを■■■■として一辺倒に書き起こすことが憚られた（そういうギャップを直視したくないがために彼女について考えないようにしているのかもしれないが）。僕にとっての■■■■。僕だけの■■■■。それを皆の■■■■と混ぜ合わせたくない。

したがって考え得るいくつかの誤解を避けるべく、形式的にはあるが（僕にとっての）彼女に関する別の呼称を導入しておきたい。

まず安直に、『彼女』というのは、どうか。誰か特定の女性を指すとき、至極一般的な代名詞であるように思う。また、皆さんからしても、僕が誰かを指してそういう言い方をすることが

取り立てた違和感にはならないだろう。実際、僕は初めからこれまでもずっと『彼女』と呼んでいる。

しかしこれより先では、この呼び方以外が必要になる。

というのも、女性なら誰にでも当てはまる呼び方をするほど僕は■■■■を遠くに感じていない（遠ざけてはいる）し、何より、■■■■をほかの女性と同じところに帰属させるべきではないと考えているからだ。大学で通りすがっただけの女性も文芸部の友人も、不遜な態度のキャバ嬢も、皆『彼女』という呼び方をして構わないわけである。そういう呼び方で彼女を捉えようとしてはいけない。

このような事情を鑑みて、『あの子』という呼び方にしておこうと思う。『彼女』と何が違うのかと問われても、窮した態度で答えるしかないのだが、なんとなく近すぎず遠すぎない感じがする。おそらく、『彼女』に比べてカジュアルな雰囲気があるさせるのだと思うが、詳しい検討はもうしばらく経ってからでも遅くはない。どうあってもあの子以外を僕が『あの子』と呼ぶことはないのだから、とりあえず今はこれでよい。

さて、呼び方の話はこれくらいにして本題に入ろう。本題と言っても、このテキストはあの子について書くということ以外何も決めてはいないから、一体何の話をすればよいのか私にも分らない。結局僕はあの子にどう干渉したい（あるいは干渉

したくない）のか。あの子は何の目的（あるいは役割）を持って僕の前に顕れたのか。現時点での僕には一切測り得ない。思い出しては忘れ、浮かんでは消えるあの子の影を、揺らいだ順番に掴んでいくしかない。だから記述の仕方はこのように取り留めのないものになる。取り留めのないものにするしかない。しかしこれでよいのだとも思う。寧ろこれがよいのだとも思う。あの子を僕の秩序で支配しようとするというのは、どんな傲慢だろうか。僕に分かるのは、その要素を多分に含むことを今更否定する気もないが、愛や恋という気詰まりな言葉で短絡的にあの子との関わり合いを表してはいけないということだけだ。

彼女を遠巻きに見ながら、仕方なくあの子と戯れる。理解しようとは微塵も思わず、今自分が起きているのか寝ているのかも分からないで、それでも語る口を閉じない。そうすることが誰のものでも、ひいては本人のものですらない■■■■そのものを捉えるひとつのやり方なのだ。

ただし、それをするには僕の手癖にいくつか問題がある。どんな事柄も何らかの流れの中にあると信じていた、もしくは信じていたい、あるいは今でも信じている僕は、流れのない空間を上手く見ることができない。星々を点として見ることが難しく、天秤座とかおおいぬ座とか、そういう全体の一部として見してしまう。それは正しいことではないと知りながら、冬の夜空

に浮かびひととき強く光るそれらを見て「ああ、オリオン座か」と見入ることを余儀なくする。

このような傾向のために、僕にはいくらかの訓練、矯正が必要だ。分かりづらい言い方をすれば、明確な意味・方向をひとつだけ与えてやる。思い出すだけではなく、その時にある定まった矢印の上にそれぞれを適当に並べていく。そこには一切の迷いも躊躇もなく、弾んだ拍子に次から次へと、まるでそれ以外に何の意味も無いというように。時にはその矢印すら見失ってもよいだろう。挙句、避けたがった普遍的な秩序に取り込まれてしまうこともあるだろう。繰り返すがこれは訓練の一環でしかない。少しずつその頻度が減っていつて、ただ語るだけの軀と化す。そうしなければ僕はきつと、三度知らぬうちに■■■■を見誤ってしまうだろうから。

だから、こ・う・い・う・言・い・回・し・に・な・つ・て・し・ま・う・の・も、仕方がないことなのだ。

オープンユアマインド。

あの頃、高校二年生の十月ごろの僕は、それを語り難い流行

り病の一部だと思っていた。依存からの逃避行による後遺症とでも言うべきか。あの子に関する明確な転落のちに一度は気の迷いとして処理したそれが、性懲りもなく僕の中に住み着いて、尚も次々に要らぬ思索を連れ込んで逼迫した心をいたく引っ掻くものだから、あの子の魅惑の被ばく者なのだと半ばあきらめて、せめて、あの子が自分を責めることなく、かといって僕以外の誰かを攻めることもないようにと願いながら漂っていた、そういう時分の話だ。この時には既に、自分が誰の何を■■■■と呼んでいるのかは定かではなかった。

だからもう少し遡って、日はまた昇って、確か七月十五日、その日の夕方。何度も見返したから覚えている。週末に際して、平日の住処である学生寮から実家へと母親の車で帰っている時だった。グラウンドでボールを追いかけた二時間のあとでは、その一時間足らずの旅路が決して短いとは言えなかった。けれどその道の半ばでラインの通知が胸を躍らせた。おどけたスタンプと「よろしくね!」という短い文を届けたスマホが静かに画面を回転させ、その何秒後。単刀直入に言って気狂いみたいに後部座席で転げた僕。立会人は一刻も早くその場から立ち去りたがった母親。一瞬見えた差出人の名前はとつくに忘れてしまっていた。それが女性で、厄介ごとを孕んだ内容でなければそれでよかった。四年弱にわたる初恋が、少なくとも十六歳の目から見て悲惨に打ち砕かれた後とあつては尚更に。

つまり七月十五日の時点では、あの子の輪郭がはっきりとしているどころか、彼女の中樞さえ僕の世界には存在していなかったわけである。

その後数週間が過ぎて音沙汰無く、僕はその存在を忘れろんざいに引き出しの奥に押し込めてしまおうとしていた。そんな折、とある偶然から彼女と連絡を取るようになる。僕が彼女が送信先を間違えたのだったか、友人の他愛ない悪戯だったか。しかしながら、どういふきつかけでそうなったかというのはどうでもよい。重要なのは、当時未だに僕が彼女の顔も知らなかったということだ。今にして思えば、少し歪なこの始まりが僕にあの子を与えてくれたのかもしれない。二〇二二年七月十五日から二〇二五年九月八日現在に至るまで、たったのいちども

■■■■や彼女があの子に先んじたことは無いのである。

それから九月に入って初めて、僕はあの子の顔をきちんと見ることになる。綺麗な顔だったのだと思う。思う、というのは僕がはつきりとその顔を思い出せないからだ。ここしばらくの間、あの子のことばかり考えていた。あの子のことしか考えないようにしていた。その所為だろう、彼女について考えようとしてもいくつかの側面について思い出せなくなってしまうていた。そのひとつが彼女の顔であった。直近で見た彼女の成人式での写真も、ご丁寧顔の部分だけモザイクがかかっていた。けれど当時を思い出してみても、僕が彼女の顔を正確に捉え

ていた時期など無かった気がする。そもそも気恥ずかしくて彼女の顔を丁寧に見た覚えがないし、よく拝んでやろうと思って遠くから眺めていたら、彼女の友達にあんまり見るな、と怒られてしまった記憶がある。だから当時の僕も「確かこんな顔だった」と思い込んでいるだけだったのかもしれない。端から彼女など見たことは無く、僕はずっとあの子と戯れているだけだった？

彼女から解き放たれたあの子が気ままに遊んで、今よりも少しだけ幼い僕を大いに悩ませた。

困り果てた僕は迷走して、押し寄せる波に堤防は大した抵抗もせず、その想いは堰を切ってしまう。苦痛をなるべくはやく終わらせようと大それた行動に出てみたのだが、彼女との関係の悪化があの子との戯れの様子に何ら影響を及ぼさなかったのは見ての通りである。そしてその時からあまり変わらない状態が今日この日まで続いてしまった。

念のため書いておくが、あの子との戯れが続いていくことをよしとしたことは、これまで一度たりともなかった。

オルフェーヴルという馬の人形に『ユズハ』という名前を付けて可愛がつてみたことも、肌身離さず持ち歩いたあの子の写真をバラバラに破り捨てて顔の部分だけ捨てたことも、誰でもよいから別の女性に向かってみようとしたことも、あの子に関する曲をいくつもいくつも書いてみたことも、そのどれもがあ

の子と彼女を切り離そうとした僕の不断の努力に相違なかった！

これから先僕とあの子がどのように絡んでいくのかは分からない。しかし、この身の結末だけは理解しているつもりだ！
遠くないうちに厚顔無恥なこの身は、妄語の罪を突きつけられて等間隔に並んだ地獄への投函口のまえに連れ出されるだろう！そしてその時僕の足を引っ張りこむのは■■■■に違いない！それがあの子なのか彼女なのか、それとも求めたその人自体なのか僕には皆目見当もつかないが、それでもすべてが洗い流されるその直前に、僕は最後に羽ばたいてみせて憚りはしないでしょう！そうやってトポロジ的に「僕は君だ！」と言い放つて歓びに顔が綻び、満足気にそこに立ち尽くしてみたところに！大きなバツテンマークを顔に貼り付けられた君が近づいてきて、すみやかに僕の心に手をあてがって一言「違う」と言っただけなら！

呆氣にとられた僕を気にも留めず、心から離れた手で今度は僕の頬を撫でってくれるだろう。そうしたらどこからか自分の顔のものと同じくらい大きなバツテンマークを取り出してきて、乱雑に僕の顔に貼り付けてくれるだろう。その直後どちらからともなく互いの手を取って、それまで生きた歳月と同じ時間の長い長いダンスを踊るのだ。僕は獄卒に追い回されるまでもなく、難解なガイダンスを終えてすべてを見通すことができるよ

うになる。邪見驕慢悪衆生、信樂受持甚似難。

「サーカスの演者になんか、なるものか！」

「はやくパーティーに参加しなくては」

「寧ろ傍觀者のままのほうが」

「そうか、ならば一生をそうやって過こしていればいい！」

「神輿がおるよ」

「そうかい」

「部屋から出てこないの？」

「ああ」

「なんだか冷笑的」

「君こそ、肩入れしすぎなんだ」

「お前はものをよく知っている」

「そうかな」

「そうだと」

「よく分からないけど、ありがとう」

「でもみんなはものをよく知らないということだけは知らなかったみたいだね」

我今見聞し、受持することを得たり。



プラットフォーム

カール

夜中であるにも関わらず、彼等はエキゾースト音を奏でながら、互いに競い合っていた。いわゆる「走り屋」だ。彼等は速く走ることに憑りつかれた連中。愛車とともに峠を駆け、己の技術を試し、常に限界を攻め続けた。彼等のほとんどは口を揃えて言う。

「峠で速いやつが一番カッコいいんだ。」

僕、代田理一は、目の前の青年に質問した。

「君は、走り屋に憧れてるの？」

「はい！あ、いや、ちょっと違います！あ、そういえば」

青年ははっとしたかと思うと、自身の免許証を僕に見せつけた。

「はじめまして、西井泰雄といいます！ 大学一年です！」

西井は常に腹から出した声を発し続けた。僕は突然の自己紹介に驚くとともに、慣れない大声に苦しみながら質問を続けた。

「ま、まず、なぜ僕に話しかけたんだい？」

いきなり話しかけてきた目の前の青年に前提の疑問を投げかける。先ほどまでとは打って変わり、西井は真剣な顔立ちに

なった。

「実は俺、」

僕はひとまず身構える。

「師匠に憧れて車買いました！」

僕の脳は一瞬フリーズした。自分が師匠と呼ばれたことはない。なつた覚えもない。何かの道場を開いたわけでもない。西井は自分が師匠といった男が啞然としていることに気づかず話し続ける。

「俺、以前友達に誘われてここに来ました。そのときはじめて、レースってやつを見たんです。」

僕は意識を取り戻した。改めて西井の話に耳を傾ける。

「そのレースが、えっと、ドリフト重視のレースで。」

「ここだと、スプリントかな。それで？」

「俺、それを間近で見て、ほんともう、すごくものすごかったんですよ！」

僕は未だ西井の大声に慣れなかったが、目の前の青年の意図を概ね推察できていた。

「黒のRX-8がカーブを曲がる時、外側に車が向いて、事故ると思ったら、逆にグワーンと内側に入っていて、ガードレールすれすれに走っていったんですよ！ それがかっこよすぎで！」

おそらくフェイントモーションのことだ。

「友達から、そのα（エイト）のドライバーはここだと有名な人だって聞いてたんです。実際に見て鳥肌立ちまくりでした！その後、友達が言ったんです。『峠で速いやつが一番かつこいいんだ。』って。そのとき、俺ビビっときたんです。車を走らせた、レースやりたいて。」

西井は僕の後ろにあるRX-8を見た。

「だから、免許を取って、車買ってから、ようやくここに来たんです。そして、黒のRX-8が来ると聞いて、走りまわって師匠の後ろにある車を見つけました！」

事の顛末を聞いた僕は、深呼吸をした。

先ほど西井が唐突に話しかけてきたとき、僕は少々困惑していた。話が支離滅裂だった。とにかく自分の伝えたいことを声高らかに、間髪を入れず伝えられたため、最初は何も理解できていなかった。

「だから師匠、俺を弟子にしてください！ お願いします！」

「え、ええと、」

今度は深々とお辞儀をされ、僕は取り戻した落ち着きをなくした。

「僕は、まず師匠じゃないし、呼ばれたこともないんだけど、」

西井が頭を上げる。

「いえ、俺の中では師匠なんです。そう呼ばせてください！」

「う、うん、そこまでいうなら。別にいいけど、」

西井の圧に押され、師匠呼びを許可してしまった。しかし、弟子をとることにについては既に考えを固めていた。

「まずは、その、ありがとう。僕に憧れる子がいるとは思ってなかったから。」

「そんなことないっす！ 師匠の走りに憧れる人なんてめちやくちやいますよ！」

僕は、伝えようと決断を下した。

「でも、」

「はい！」

「うーんと、」

「はい！」

「その、」

「はい！」

「……」

沈黙せざるを得なかった。相槌に明るさの圧力がかかっている。ここで、「NO」とはいえない。その勇気が、今現在の僕にはなかった。

「さ、最初は、西井君の車を見たいかな。」

「え！ もしかして、入門試験みたいなことですか？」

ほとんど、口から出まかせだった。本当は弟子を取りたくなかった。だが、今の発言で逆に弟子を取るようなスタンスに変わってしまった。

師匠の突然の入門試験に驚く西井だったが、すぐに元の自信溢れる表情に戻り、走り始めた。

「勿論受けます！ 今から自分の車、取ってくるんで！」

そう言い残して、早々と走り去っていった。西井の姿が消えた後、僕はひどくため息をつき、苦笑した。

「試験なんて言っていないんだけどなあ…」

困り果てたが、前言撤回は僕の性分に合わなかった。

結局、西井の試験を執り行うことになった。

しばらくして、僕のRX-8の隣に一台の白いオープンカーが停まった。NCロードスターだ。ホワイトマイカカラーが外灯に照らされ輝いて見える。安価で入手できるスポーツカーの代表格の「つである。十数年来のオープンカーらしい幌の破れが、いくつか見て取れた。

「これが君の車だね。」

「はい、80万で購入しました。」

「グレードはどんな感じかな？」

「RSです。2LのNA。」

「ちよつと、エンジン見てもいいかな？」

「ええ、勿論！」

僕はエンジンルームを調べた。中は思ったより綺麗に整備されている。その中央に置かれているのは、確かに2Lのエンジ

ンだ。NC系が他の型式に勝る点の「つである。

「中も見ていい？」

「ええ、喜んで！」

西井が執事のようにドアを開け、そして乗車を促した。僕はまず内装とシフトレバーを確認した。黒を基調としたシートに、シンプルで標準的なEパターンの6速マニュアルと3ペダル。マニュアル車なら、結局これが一番いい。

「いい車だね。」

「ありがとうございます！友人と相談して決めました。」

おそらく峠に誘った友人だろう。

「よし、じゃあ早速走ってみようか。」

覚悟を決めると、かえって楽しくなってきた。

「お、いよいよつか！しゃあ！気合い入れるぞ！」

峠に彼の甲高い声が響いた。

車内に入った。西井は運転席に座ると、手慣れた動作で発進の準備を行った。

「じゃあ、峠を走ってみよう。まずは普通の速さで。」

「了解です。しゅっぱーっ！」

この峠の道は、私有地化された元公道であり、荒れた旧道がある程度整備されてレース場に様変わりしている。現在は、整備した団体の下に運営されている。

西井は峠をすると駆けていく。

「師匠、ここっていつから人気になったんですか。」

西井が質問をしてきた。

「ここは昔から『走り屋の聖地』って呼ばれててね。整備される前にも、そういう人たちが無茶な走りをしてた場所なんだ。」

「へえ、でもそれって、違法なんすよね。」

「勿論。公道での危険な暴走行為だからね。彼らの中には、その行動を何とか正当化したがる人もいるけど、真つ当な正論は一つも聞いたことがないよ。」

「けど今は、こうやってレース場になって、合法的にレースができるようになったんですね。」

僕は真つ直ぐ前方に視線を向けたまま、会話を続けた。

「数年前にね。レース場になるって決まったとき、走り屋たちは大いに喜んだけど、その後にレースするにはライセンスが必要ってことになってね。そこで反感を買ったんだよ。そのライセンスの入手が難しいと言ってたね。」

西井が首を傾げた。

「え、でも俺、免許取ってから」か月経ってないけど、ライセンス取れましたよ。」

「ああ、それは西井君に交通違反の前歴や人身事故歴がないからだよ。君は多分、そこまで困らなかったよね。」

「はい、料金と免許証で取れました。」

「彼らはしばしば警察に捕まったり、古びた道で競い合うものだから事故を起こしたりと色々やってたから、彼らにとっては、ライセンスの取得がとても難しかったんだよ。」

「なるほど。」

「でも、取得の条件自体は比較的易しめだから、色々と条件を満たせば、そういう人でも取れるものではあったんだ。」

西井のZCは、峠道の間付近のヘアピンカーブを難なく走り抜けていった。かなり熟達していると思う。初心者らしいミスや、不安定さはあるものの、免許取得後「か月でこの走りは見事なものだった。クラッチの繋ぎもスムーズで、ハンドルの舵角も最小限に抑えられており、ZCという車の運動性能を理解しているといえる。となると、彼は世間一般でいわれる、感覚派のドライバーなのではないか。理論で突き詰めるタイプではないようだし、車に対する情熱はあるが、まだ車についてのノウハウなど持ち合わせていないはずだ。だとすれば、この「か月の間で西井は、車の走らせ方を知らず知らずのうちに身体に覚えさせたのか。」

「それで、走り屋の人たちはその後どうしたんすか？」

西井は話の続きが気になったようだ。僕は先ほどの話の内容を思い出す。

「ええと、ああ、走り屋たちはその後、晴れて公式なドライバーになったんだけど、やってることは以前とあまり変わってな

かった。それからしばらく経つと、他の公式ドライバーと色々揉め事を起こすようになって、団体から注意喚起が出されたんだよ。」

西井は明らかに不快な顔を表した。彼らの行動が気に入らなかったのだろう。

「それ以来、彼らは普通の公式ドライバーを排斥して、峠や首都高から来たストリート出身の人たちで固まって、派閥が生まれた。これが、元走り屋の人たちが今、ストリート系って呼ばれる由縁なんだよ。」

「へえ、そうだったんすね！　じゃあこの峠って、そのストリート系の人たちが多くってことすか？」

「その通り。さっきも言ったけど、元は『走り屋の聖地』だからね。気を付けた方がいいよ。多いとは言わないけど、彼らの中には、かなり非常識な性格を持っている人もいるから。」

「わ、わかりました。」

これまでとは打って変わって、歯切れの悪い返事だった。僕はその理由をすぐに察し、微笑する。

「ごめん、僕のそのうちの一人かもね。」

「え、あ、いや違います、これは！」

「いいんだよ、そう思われても仕方ない。」

「……」

それまで快活に会話していた西井が初めて沈黙した。師匠に

失礼な言動をしてしまったと悔やんでいるのかもしれない。僕はフオローを入れるように、話を続けた。

「嘘に聞こえるかもしれないけど、僕は別に走り屋じゃなくて、元々チームに所属してたんだ。」

「チーム？」

「レーシングチームだよ。本格的に公式レースに出たりするところだった。」

「ええ！　そうなんすか！」

元氣な西井が帰ってきた。

「レーシングチームって、サーキットとかで、めちゃくちゃ速い車で戦う人たちのことっすよね！！」

「う、うん、まあ大体あつてるかな。」

今はちよつと違うかもしれないが。

「師匠、そんなとこに所属してたんすか？　めちゃくちゃすごいじゃないですか！！」

「え、ああ、うん、ありがとう。でも、全然活躍してなかったから、あんまり自慢はできないよ。」

その直後、車の後方から光が入り込んだ。後続車だ。

「あ、西井君、後ろ。」

「おっと」

西井は、話に夢中だったため、慌てて運転に集中した。後続車は西井のZより速い速度で迫ってきた。目前には左コーナ

ーも迫ってきている。僕は西井に警告した。

「ここも、さっきのヘアピンほどじゃないけどきついから、後ろに気を付けて行こう。」

「わかりました！」

その瞬間、後続車は一気に加速した。後続車はZCにかなり接近した直後、追い越しのため、右車線に進入した。コーナー前の追い越しは、非常に危険であり、衝突寸前だ。

「気を付けて！」

「はいっ……！」

突然の出来事に焦った西井は、ハンドル操作がおぼつかず、センターラインを少し越えそうになった。すかさず僕がハンドルの握み、慎重にイン側に切る。ZCはラインを越えることなく、コーナーを曲がった。コーナーの中央まで来たとき、後続車はアウト側からZCの隣に並んだ。窓からその車が視認できる。シルバーのクーペ。初代86だった。

86はそのまま加速し、ZCを抜き去っていった。

「あつぶないなー。あれって明確なマナー違反ですよ。」

西井が僕の前で初めて怒りを露わにした。僕は彼の言葉に同意した。

「うん、本当に危ないよ。本当に。」

僕の目は、86を見ていた。

峠を走り終え、二人はパーキングエリアに戻ってきた。すると、駐車したZCの右隣にすぐさまあの86が停まった。明らかにこちらを意識している。

「何なんでしょう。」

「あー、ちよっと待ってて。」

86から男が一人出てきた。中肉中背で短髪。

僕は彼を覚えている。

僕はドアを開き、外に出た。

「……」

西井は息を飲んだ。少し恐怖を覚えていることが分かる。その様子を見た僕はウィンドウ越しにつぶやいた。

「安心して、僕が彼と話すから。」

僕は男と対面する。

「あの、なんでしょうか？」

「ん？なんだお前、俺を覚えてないのか？」

男は眉を顰め、僕を睨みつけた。僕は臆することなく、話しかけた。

「勿論覚えてますよ。半年くらい前ですよ。僕と勝負したの。」

「覚えてたんなら、そんな他人行儀はやめてくれ。」

男は86にもたれかかり、たばこを吹かせた。

「今日も楽しく『勝負』しようと思ってたのによー、助手席に

いたお前が邪魔したんだぜ。」

「あれのどこが勝負だというんですか。明らかな危険運転です。」

「うるせえなあ。」

男はさらに僕を睨みつける。その後、運転席の西井に視線を向けた。西井がぎよっとする。

「この青二才、お前の親戚かなんかか。」

「いや、違う。僕とは関係ないよ。」

「んなわけねえだろ。色々指導してるようだな。」

確かにその通りではあるが、ほんの数十分前からである。男は指で窓をドンドンと突きながら言った。

「俺はお前に負けた。だから素直に練習したんだぜ。毎日な。」

「他人に迷惑かけてやる勝負事は楽しいですか。」

「ここにいるほとんどの奴らは俺と同類だろ。」

こればかりは言い換えそうにない。実際、ここはあまり治安が良くない。煽りあいのレースは今でも多少行われている。

「まあいい。要はお前と、またバトルがしてえんだ。やってくれるよな。」

「結構です。今僕は忙しいので。」

「ほう、この若造の世話か。」

「そういうわけじゃない。」

西井を関わらせるわけにはいかない。ここは突き通したい。

すると、男は形相を変え、人を煽るように嘲笑った。

「はーん、お前がバトルしたくねえっていうことはつまり、俺に怖気づいたわけか。成程な。」

なぜそんな突飛な考えに至るのか、とは思わず、単なる煽動だと自分に言い聞かせる。

「所詮お前も、過去のことが忘れられない臆病者ってわけか。まあ無理もねえか。あんな事故起こしといたらな。」

僕は、少し動揺する。

別に隠しているわけではない。過去のニュース記事を見ればすぐわかる話だ。だが、自分の秘密を暴かれたような気分だった。不意を突かれた僕は、沈黙してしまった。目の前の男は話し続ける。

「トラウマなんだろう、左コーナーが。」

僕は少しうつむいた。違うといえば嘘になる。ここからどう対処すべきかと考えていた。そのとき、

「おい！」

西井が出てきた。不味い。

「お前、さっきからなんなんだ！一方的に絡んできたと思ったら、急にバトルなんて持ち掛けて。こっちは『師匠』にまだ教えてもらうことが山ほどあるんだよ！早くどっかいけ！」

僕はある意味感嘆した。年上であろう男に対して、これほど堂々とした発言ができる青年は少ないだろう。言っていること

も至極真つ当だ。師匠という点を除けば。

「師匠……なるほどな。お前の弟子だったのか。」

「いや、それは勝手に言ってるだけで」

「ああ、そうさ、俺は代田さんの弟子さ！」

そこは堂々としてほしくなかった。西井を守ろうとした努力が水の泡だ。男はしばらく西井を見つめ、何なら考え事をしていた。数秒後、男は言った。

「よし、そしたら、弟子。お前と勝負だ。」

「……ええ!？」

「はあ」

こうなることは予測できていた。西井の性格はかなり理解できていたため、ここで相手に激昂すること、そして男が勝負をもちかけることも考えられた。ただ、僕がそれに対処できなかっただけだ。

「お前が師匠と謳うその男のメンツを立ててえならよ、絶好のチャンスじゃねえか。」

「え、いやでも」

「おっと、嫌とは言わせねえぞ。ここでは、バトルを持ち掛けられたら、Yes しかないんだぜ。」

西井は動揺していた。それもそうだろう。ストリート特有の、暗黙の了解なのだから。それに、この峠ではその色が特に濃い。気が付けば、周りには沢山の人々が傍観していた。西井も彼ら

の視線を感じているだろう。

「そいつはな、この峠じゃ一際有名人だ。一番強いんだとよ。俺は認めちやいねえが。お前がNoと言ったら、意気地なしとみなされて、師匠の評価は丸つぶれだ。」

これは妄言だろう。実際自分の評価などどうでもいい。断つたつてこの峠に行かなくなればいいだけの話だ。しかし、西井はその言葉を真に受けている。表情が段々と固くなっている。ここは、早く助言しなければ。だが、今の僕は慌てていた。的確な言葉が出ずに、思った通りの言葉を並べる。

「西井君、彼のいうことなんか聞かなくていい!そんなルールはない!」

「万が一だが、お前が勝てば、師匠の顔に泥は塗らないだろうなあ。」

「……」

西井は沈黙した。周りの視線が彼に集中した。

「さあ、どうする。」

「西井君!」

数秒間の静寂が訪れた。

「……やります。やってやりますよ。そのバトル。」

その目は、覚悟を決めた目だった。

「そんなとこで覚悟なんて決めなくていいんだよお!」

僕は初めて西井を叱った。会ってまだ一日も経っていない人間を叱るのも初めてかもしれない。

「す、すみません師匠！ どうしてもあいつにムカついてしまつて。でも、師匠を馬鹿にされた以上、やり返さないと、気がすまないつすよ！」

「思いつきり相手の手のひらに寄せられてるよ……」

西井は良くも悪くも直情的で素直だ。とてつもなく良い奴なのだが、それゆえに騙されやすくもある。今回は、相手の罠にまんまと引っかかってしまった。罠というか、挑発に乗っただけだが。

「西井君は、レースのやり方とかわかるの？」

「わかんないです。」

「ポイントシステムは？」

「……なんすかそれ。」

「ルールの選択権とかは？」

「……自分で決められるんですか。」

「……自分の順位は分かる？」

「……どこに行けばわかるんですか。」

「だめだこりゃ。」

「すみません……」

相変わらず返事だけは元気だ。

とんでもないことになってしまったと後悔している。彼と会

わなければこうはならなかったのか。はたまたあの男と再会したのがまずかったのか。いや、そんなことを考えるのは無駄だ。起こってしまったことは仕方がない。今はただ、西井君の心配をしよう。

「えっと、西井君。」

「はいっ」

「このあと、どうする気？」

「……勝負を受けます。」

「まだ、レースなんてやったことないでしょ。」

「それはそうですけど。」

「このままだと、君は大恥をかくことになるかもしれない。僕の評判に泥が付くのは構わないんだ。でも、もしかしたら、君のこれからのカーライフに、傷がつくかもしれない。」

西井は、自分の今置かれた状況を考えているようだ。このままレースに出ても、あの男に惨敗して、負け犬のレッテルを張られるだろう。プライドとかそういう話じゃなく、ネットだとかそういう情報はすぐ広まる。デジタルタトゥーになりうるのだ。そういったことが予想できたのか、急に西井は冷や汗をかきだした。

「……今すぐにでも断ろう。そのほうが賢明だ。」

西井は黙ったままだった。理解したのだろう。そして、口を開いた。

「いや、俺、やりたいです。」

僕は驚く。やりたい？自分からレースをしたいのか。

「この期に及んでこんなお願いは、失礼だと思つてます。でも、俺は、前々からレースがしたかったんです。これから色々、憧れの師匠に教わりたかったんです。それで、今回、そのレースの機会が来た。だから、」

「な、なに言つてるの。」

西井は改めて僕のほうを向いた。

「だから、俺に、レースを教えてください！ あいつに勝ちたいんです！ お願いします！」

僕は、その迫力に慄いた。元々押しに弱いが、今回のお願いには、それとは別に強烈な熱意と覚悟が伝わってきた。その時僕は多分、冷静でなかったんだろう。

「わ、分かった。」

日本怪異研究機関調査ファイル1…旧ど〇でもドアについて

うちの先祖絶対百姓

※注…日本怪異研究機関は日本国内において発生する、科学技術や常識で説明のつかない現象及び存在を調査・記録し、一般市民の安全確保や未解決事件の解明などに役立てることを目的とする民間機関（ほぼSOP財団と言っても過言）である。名称については、度々本機関の職員から「いくら何でも中二病すぎる。知り合いに話せない」「もっと格好いいのがいい。横文字にしろ」「一周回って好き」などの辛辣な意見が出ているのだが、申請が面倒なため誰も改名手続きを行っていない。主な業務としては怪奇現象に遭遇した人物への聞き込みや現地の調査、可能であればサンプルの回収などをおこなっており、それらによって得られた情報は「調査ファイル」に個別にまとめられている。この調査ファイルのだが、書き手の個性がかなり強く出ており、壊れかけのロボットのように全て半角カタカナで書かれたものやゲームシナリオ風に書かれたもの、小学生の日記風に書かれたもの（担当者は作文が苦手

なだけで他意はないと供述していたが、やけに怖い）などバリエーションが様々であり、非常に読みにくいものとなっている。（徹夜明けで半角カタカナ文書にあたった某職員は調査ファイルをシュレッダーにかけた。）また、当調査ファイルにおける怪異の名称は担当者の独断と偏見となっているため、不適切な表現が用いられている可能性があるが、原文の個性を尊重し、修正は行っていない。

（西暦20xx年2月xx日 加筆）

・調査ファイル1…旧ど〇でもドア

担当者…シリカゲル山口

ど〇でもドアについてご存じだろうか。

ご存じ某猫型ロボットが所有しているシークレットな道具の一つで、行きたい先を思い浮かべてドアを開けば世界中どこにでも一瞬で移動できるという大変便利な道具である。

この道具、作中では未来の道具として定義されているのだが、それと似たような能力を持つは古くからこの国に存在していた。それこそ空間と空間とを区切る「扉」という概念が存在するようになった遠い遠い昔から。

和製ど〇でもドアとでも言うのだろうか。いやしかし、猫型ロボットのそれも「ドア」とは言っているものの概念自体は和製であるし……。猫型ロボットのそれを「ど〇でもドア」とするならば、旧来のそれは「旧ど〇でもドア」とでもしておこう。

「旧ど〇でもドア」は日本国内のほぼ全域（離島などは未調査）に出現し、その形状は固定されていない。それこそ洋式の「ドア」のみならず、ある時は引き戸、ある時は向こう側が透けた自動ドア、ある時は掃除用ロッカーの扉といったように……ただ「扉」であるという点だけが共通している。性質としては「ど〇でもドア」とほぼ同じで、行きたい先を思い浮かべて扉を開くことで目的地に大幅に早く到着することができる。「到着する」ではなく「大幅に早く到着する」という表現を使った理由として、「旧ど〇でもドア」は「ど〇でもドア」と異なり、ドア先がそのまま目的地になっているのではないことが挙げられる。また、「旧ど〇でもドア」は「ど〇でもドア」と異なり、使用にあたって大きな危険を伴うことも特徴の一つである。

このように説明ばかり聞いていても「旧ど〇でもドア」についての全貌は掴みにくいだろう。今回、実際に「旧ど〇でもドア」に遭遇・使用した人物に奇跡的にインタビューを行うことができた。現代において怪異に遭遇し、尚且つ生存している人物は少なく、それゆえ本機関への情報提供も行ってくれる人物は非常に貴重である。該当者からの情報は本機関が「旧ど〇で

もドア」の詳細を把握する上で大変有効なものとなるだろう。

・「旧ど〇でもドア」遭遇者の証言（録音）

西暦 20xx 年〇月〇日 匿名

あつ、どうも〇〇といいます。なんかお菓子と飲み物くれるっていうんで、証言？ っていうのすることになりました。なんか献血みたいですね、こういう怪しそうな所でもこういう事するんだ。意外だなあ、ハハハ。それで、僕がこの前体験した「変なの」について話せばいいんですね。それにしてもどこで僕のこと知ったんですか？ そんなに大々的に情報発信したかなあ……。もしかして闇の組織っぽくハッカーとか雇ってる感じですか？ ツ〇ッター？ お兄さん昔の名称の方で呼ぶ派なんですね。それにしてもツ〇ッターかあ……。僕フオロワ―1桁なのによく見つけたなあ、ちよつと嬉しいです。あんな変な体験したんだからどうしても誰かに話したかったんですけど、友達に話しても絶対信じてもらえないと思ってツ〇ッターに書き込んだんです。へえ、こういう話だけ抽出するプログラムがあるんですね。僕もそういうの欲しいな……。最近推し（大人気VTuber、性別・年齢不詳、主食はグミ）のこと調べてても荒らしのツ〇―ト見て嫌な気分になっちゃうことが多いくて。あつすみません。長々と話しちゃって……。さつさと本

題に入りますね。

あの日……▽月△日だったかな。夏真っ盛りの日でした。僕はその日、推しの○○ちゃん（人気VTuber、性別・年齢不詳、主食はグミ。この情報いるか？ by 担当者）の限定ポスターを買う予定があつて、前日のうちに朝5時にアラームをかけたんです。朝9時に販売が始まる予定だったので家からお店まで1時間弱かかることを見越して、通学・通勤ラッシュを避けて一時間前には現地についておくために朝5時起き。絶対に起きられるようにベーターヴェンの「運命」が爆音で鳴るようにスマホをセットして、万が一スマホが故障した時用にタブレットには工事現場の環境音ASMR（？　？　？）をセットしてベッドから離れた場所に置いておきました。ベッドサイドだと寝起きで止める危険性があるので。さすがにこれで大丈夫だろうと思って、枕の下にプリントアウトした○○ちゃんのお顔を入れて寝たんです。

で、寝坊しました。もう愚かof the ベストイヤー。馬鹿という言葉では言い表せないほど愚かです。愚かという言葉は自分のためにある。予の辞書には愚かという言葉しかない。我、事において後悔しまくる。私は自分が愚かだという事を知っている。自分の愚かさを正確に言い表せる言葉が見つからなくて国語辞典で頭を殴りました。語彙で殴るってね、ガハハ。

目覚まし自体は鳴ったんです。……僕が爆速で止めて二度寝

しただけで。アラームをあまりにも不快すぎる音に設定したせいで体が無意識に対象を排除しにかかったということでしょう。人間の自己防衛本能は凄いですね。もういつそ○○ちゃん之歌ってみたをアラームに設定しておけば良かったんでしゅうか……。いや、それだと心地よすぎて二度と起きれなくなるな。子曰く、目覚ましのアラームは不快すぎても心地よすぎてもダメ。もうっ！ 孔子ったらこんな大事なことは先に言っておいてよねっ！ 割愛。（割愛って、単語に愛入ってる割にやってることに愛はないよね。愛は人のエゴだからね。真理かな。真理かもね。）

で、起きたのは8時でした。人間って寝坊した時世界で一番賢くなりますよね。僕も目標起床時間から3時間超過している時計を見た瞬間にIQが53万になりました。戦闘力かな？（無駄に大きい数字を言おうとしても数えられる数字に留まってしまうあたりが凡人……）そして家からお店まで1時間弱かかること、あと5分で9時前にお店に着く最終バスが最寄りのバス停（徒歩15分）から出ることを把握し、財布だけをひっつかんで家を飛び出しました。あゝッ、夏の日差しイ！ 太陽燦燦！ 髪も梳かしていなかったし、そもそもパジャマだったので人間ではありませんでしたが、その時の僕には人間の尊厳よりも大事なものがありませんでした。愛（エゴ）です。自分に出来る限りの全力疾走でバス停を目指しました。ダンジョンで転が

って来る石玉に追いかけてられている冒険者よりも、沈みゆく夕日を追うメロスよりも体感早く走りました。カーブとかたぶんドリフトしてました。足元からゴムの焦げる匂いしたもん。湯気も出てたし。蝉の大合唱がギャラリーの歓声に聞こえます。

ああ……夏だ……暑い……。しかし俺は夏よりも熱い男、○ちゃんへの篤い愛で心を燃やせ！

しかし、僕がバス停に着いた時にはもうバスは……（皆まで言うなッ）。僕はその場に崩れ落ちて慟哭しました。……嘘です。バス停には他にも人が居たため、既にかなり人間を止めていた僕はそれ以上不審者ムーブをすることが出来ませんでした。全力疾走してきて尋常でなく息が荒いことで1アウト、髪を振り乱し、勇者はほとんど全裸……ではなく、どこに出しても恥ずかしいパジャマ姿であることで2アウト、通報までもう後がありません。おつとここで監督、代打の指示！僕は心の中で23歳の全力の男泣き（スパーでお菓子を买买ってもらえない時の5歳児 Ver. ロリングもあるよ！）を披露しながら、そつとバス停を後にしました。悲しい背中部門世界一位の男。9時以降にお店に到着するバスを待つという選択肢はありません。○○ちゃんは大人気VTuberなので、発売と同時にグッズは売り切れてしまうのです。よって今回のポスターは諦めるしかないのです……。僕はとぼとぼ家路につきました。世界広しいえども「とぼとぼ」なんて効果音をリアルで出せる人間は僕くらい

でしょう。静まりかえった帰り道で、僕の足跡だけが響いて……なんかこういう曲ありそう。……ん？ 静まり返った道？……何イイイーツ！？ さっきまでここにあった蝉の声は？（導入終わり）

○○ちゃんのグッズが買えないことが確定し、絶望していた僕はそこでやつと周囲のそこはかとない違和感に気付きました。そこで「この道……何か変」という感じで、きよろきよろ辺りを見回してみた所、道の様子がいつもと違う。僕的にはバス停から家まで、来た時と同じ道を変わず歩いてきたつもりだったんですが、いつの間に道を間違えていたのか見たこともない場所に立っていました。そしてそこが何とも言い難い変な雰囲気でした……。庭に錆びたトタン屋根の小さな倉庫があるちよつと昔の家（ぜひ間取り図が見たい）だとか、経年劣化でボコボコすぎてもはやマウントホエールバックになっているアスファルトだとか、人ん家のブロック塀の上にひっそり佇んでいるタバコの空き箱だとか……見た目は普通の住宅街なんですけど何だか違和感がある。まず、さっきまで五月蠅いほど鳴っていた蝉の声が止んでいて、他にもありとあらゆる環境音がないんです。一瞬、さっきの出来事がショックすぎて鼓膜破れたのかなーと思ったんですけど、自分の呼吸音とかはちゃんと聞こえるんでそれはないってわかりました。あと、行きは35℃

くらいあつた気温がかなり下がって、涼し気になってました。あれくらいの気温なら朝からでも買い物に行けますね。そして最後のチェック、スマホを開いてネットに……繋がらない！もはや電源がつかない！

「音がない」「気温が下がる」「外部との連絡がつかない」の3つが揃ったこの状態、察しの良い僕はピンとききました。急な環境変化が表すのは外部との切断、つまりこの空間は何かしらの異空間である。僕はオタクなのでこういうのには詳しいのです（主語がデカイことは認める）。ホラー映画でフラグの匂いに気付かず真っ先にミンチになる声デカ排他的陽キャとは違い、自分の置かれた状況を分析し、後に起こりうる二次元的な事象に備えることが出来ます。つまり……

「もしかして僕……“迷い込んで”ます？（暗黒微笑）」

さあ始まりました！ これはもう確実にストーリーが始まっちゃってます。ここからは気を引き締めていかなければなりません。なんせストーリーが始まっちゃってるので、四肢を挽がれたパツ金吸血鬼が道に落ちてくるかもしれないし、美少女がトラックにはねられて世界がループするかもしれないし、「普通」が嫌いな女子高生に出会うかもしれません。……何とは言いませんが偏ってますねえ。うるせえ！ こんなの皆好きだろ！可能性は無限大！

見た感じ、どう考えてもホラー系ですが。

いやあ、それにしてもまさか自分が主人公キャラだったなんて驚きだな。どこにでもいる平凡なオタクなんだが。主人公として「平凡キャラ」は多いといえども、二次元の「平凡」は「平凡」ではないですし……僕は通り魔に刺されそうな人がいたら普通に逃げます。はい。え？ 人はそれぞれ自分の人生の主役だって？ うるせえガキ！ ママとおねんねしろ！

……とはいえ、現状ここに迷い込んだのが僕だけっぽいので、僕は確実に主人公でしょう。複数人グループだと危なかった……導入で雑に殺されるモブの可能性がある。まあ主人公でも容赦なく殺される作品も無きにしも非ずなのですが……そこはないと思いたい。そんなことを思いながら、僕はワックワックで辺りの探索を始めました。こういう状況では、とりあえず何かアクションを起こさないとストーリーが進行しません。「迷子になったら動くな」を異空間で実践してはいけない、これ常識です。さてと……100円を備えられそうな地蔵はあるかな……

しばらく付近を探索すると、絶対にこれイベントだな……というのを見つけてしまいました。ブロック塀が続く道の途中に、何やらデカイ門があつたんです。骨組みがぶつとい木材でできていて瓦屋根が上に乗っている感じの、某忍術学園の入り口とか、寺とか神社の門っぽいのを思い浮かべてもらえば良いと思います。現代的な住宅街に対して、木造の古そうなその門はめ

ちやくちや浮いてまして……すごい目に着いたんですね。こんなに分かりやすいのはもうそれでしかありません。ゲームなら確実に「？」マークが出ていることでしょう。僕は門に近づいて、より詳しく観察してみることにしました。さっき寺とか神社の門っぽいと説明したんですが、具体的な寺の名前とかは門には書いてありませんでした。寺・神社ではないということ、良かったのか悪かったのか……いや、こういう場合の寺とか神社って存在がピンキリじゃないですか。悪いものから守ってくれることもあれば、逆にそういうものの温床だったり。神社とか下手な心霊スポットよりヤバいつて聞きますし……。閑話休題。

何やねんこの門どこに続いているんやっていう謎は増えたんですが、とりあえずもう少し門を観察してみました。すると門の横の方に注意書き？ みたいな看板が立ってまして、何かが書かれた紙が貼ってありました。近づいてよくよく見ると「ちかみち」と書かれています。……何の近道でしょう。地獄とか？ ……これはいけません、一発アウトのイベントの可能性があります。ゲームの主人公なら残基とか死に戻りとかのシステムがありますが、僕は生身、一回死んだら死んでしまします。何だこの頭の悪そうな文章は。とにかく、もう少し付近を探索して、もうちょっと危険度が低そうなイベントを探そう、そうしようということになりました。そして僕は一旦デカイ門

を後にしました。

Long time ago (体感30分後) ……僕は再び門の前にいました。もう何かね！ どこを歩いてもここに帰ってきちゃうみたい！ まだマップ解放されてないみたいですね詰んだ。この門を通れという圧がすごい。おそらくこのイベントを終わらせないとチャプター1が終わらないようだ……。とはいえど通りたくはない……もう全然通りたくない。せめて門の向こうがどうなっているかヒントぐらい欲しい。僕はホラー映画のネタバレとか全然気にしないタイプです。ネタバレしてあっても普通にビビるし。ということで、精一杯背伸びをして門に繋がるブロック塀の向こう側を覗いてみたなどした。まあ竹がめっちゃちや生い茂ってたので何も見えなかったんですけどね！ 竹って何か怖いですよ。昔ながらの心霊スポットとか竹が生えてるイメージ強いですし。

そんなわけで八方塞がりになったので、いよいよ門を通ってみることにしました。とりあえず、扉を開けたらすぐ足元を確認する！ 足場がないかもしれないから！ あと軽率に扉を閉めない！ 帰れないかもしれないから！ そう自分に言い聞かせて一度大きな深呼吸をしました……吸いすぎて激しく噎せました。気を取り直して……僕は門の前に立ち、扉を開けました。

結論…足場がありました。しかし、門の向こう側に降り立った瞬間、扉は閉めてしまいました。突然頭の中で声が聞こえ「ふりむくな」つい扉から手を離してしまいました。後ろを向けないので、もはや引き返すことはできません。

扉の向こうは夜でした。門を潜るまで日は上っていたはずなのに。さらにしとしとと雨も降っています。やっと本番が始まったなという感じです。さっきまでの違和感など屁でもありません。こちら側の門の周辺には錆びた自転車や鉄の傘立て、空き瓶を入れる箱、ひっくり返ったねこ車や植木鉢など様々な物が散乱しており、正面に向かって長い石畳が続いていました。どこから「振り向いた」判定になるのかわからないので顔は動かさず、眼球だけで辺りを見回しました。この時ほど眼球が顔の前について良かったと思ったことはありません。草食動物であればデフォルトで振り向いた判定をされていたかもしれないかもしれません。また頭の中で声がしました。「かさ」を「させ」右足の少し前に立っていた鉄の傘立てから、黒い傘を一本取りました。傘立ては雨にあたってすっかり経年劣化しており、所々白い塗装が剥がれて赤錆が浮いていました。当然、そこにささっていた黒い傘も金具が錆びきっており、開こうとすると「ぎぎぎ」と鈍い音を立てて赤錆の破片と濁った雨水がぱらぱらと落ちてきました。「あるけ」ずっと立ち尽くしているわけにもいかなないので、正面に続く石畳の道にむかって傘を差し

て歩きました。傘を差していて、周囲には確かに雨が降っているというのに傘が雨粒を弾く音はまったく聞こえませんでした。石畳には水たまりができているのに、履いている靴はまったく濡れませんでした。辺りは真っ暗で、街頭一つ無いというのに、歩く三步ほど先は常にぼんやりと明るくなっており、そのおかげで何かに躓いたり道を見失うことはありませんでした。頭の中の声はだんだんと流ちょうに話しかけてくるようになりました。声はこう言いました。「ここではうつむくなあしをとめるな おおごえをあげるな ふりむくな」実に厳しい。オルフェウス Lv100 です。デフォルトの声が「おおごえ」に該当する可能性があったので、足を止めずに頭の中だけで理由を尋ねました。「むだなうごきはおそれのしるし じぶんをもたないやつは なにかにとつてかわられる」声が答えました。なるほど、実に論理的。行動よりも、それが発生した原因である精神状態が大事であるというのは納得です。こないかにもヤバそうな場所には人間の人格を乗っ取る系の“何か”が大量に潜んでいるのでしょうか。不気味な状況に錯乱し、それを態度に出してしまったが最後、精神の隙を突かれて乗っ取られてしまうようです。そうこう言っている内にいつの間にか雨が止んでいました。目を凝らすと、もう少し先の方で石畳が途切れ、白い玉砂利の道に代わっているのが見えます。玉砂利の道の両脇には等間隔に石灯籠が並べられていくつかの赤い鳥居が立

っていました。そして道の最奥には入ってきたものと似た、白木造の門が建っており、その周辺は急に明るくなっていました。しかし、明るいのは石灯籠のおかげではありません。石灯籠には灯りはともっていません。玉砂利の道の先は言葉通り、その空間だけ「急に」明るくなっていたのです。そこだけ上から昼光色のライトで照らされているようでした。自然な光ではなく、限りなく人工的で作画的な明るさです。そして、明るいというのに全く安心感が湧いてきません。現代人の我々にとつて光は常に共にあります。そのため闇を恐怖こそすれ光を恐れるというのはお門違いです。強烈な違和感を感じたため、またしても頭の中で声に問いかけました。

「あそこは かみさまのみち いくな」声は答えました。なるほど、神様の道だったようです。神社とかでも道の真ん中は神様が通るから開けとけつていいいます。つまり、あそこは人間ごときが歩いてはいけない神聖な道なのです。明るいのに怖かったのはそういう無言のオーラが出ていたからでしょう。よし、あの道は絶対に通らないようにしよう。しかし困った。声によると「足を止めてはいけない」のです。動揺を態度に出すと精神を乗っ取られてしまいます。しかし神の道を歩むのは怖すぎる。えげつない祟りとか喰らいそう。歩きながら死ぬほど脳を回して考えました。同時並行で前を向いたまま周囲を見渡して他に分岐する道が無いかを確認します。すると道が石畳から白

砂利に切り替わる直前の左の藪に不自然な切れ目があり、その前に小さな矢印看板が立っているのが見えます。看板には「よけみち」と書いてあります。よけみち……避け道！ しめた、あそこで曲がりましょう。そうすれば神の道を汚すこともなく、足を止めることも回避できます。安心して、石畳をゆつくりと歩いていきました。

その時、白砂利の道の奥の白木の扉の向こうから、なにやら賑やかな音が聞こえてきました。シャンシャンと鳴る鈴の音を主として笛、琴、太鼓など、様々な音が混じり合つて賑やかなハーモニーを奏でています。所々祝詞や複数の笑い声なんかも聞こえてくるこれは……ヤバイ。おそらく神様の一行です。見られてはいけないし見てはいけないと本能が言っています。今のところ姿は見えませんが、音はすぐそこまで迫っています。走りに見えない最大限の競歩で歩き、避け道に飛び込みました。頭の中で「はしるな」という声が聞こえた気がしましたが、ガン無視です。体全てが白砂利の道の直線状から消えたと思つた瞬間、後ろの方で門が開く大きな音が聞こえました。次いで賑やかな演奏と男女の笑い声、何か大きなものが地を踏みしめる音が聞こえてきます。振り返りませんでした。そもそも「ふりかえるな」縛りがあるのですが、もし振り返り自由だったとしても振り返りません。見てはいけないものを見てしまひそうです。

逃げ込んだ「避け道」はほとんど獣道の様相で、脇は背の低い笹と木々で囲まれていました。ヒルが居そうで大変不快でしたが、先ほどまでの緊張感と比べれば何でもありません。大人しく前に進んで行きました。所で、この状況にもようやく折り合いがついてきたので、門を潜ってからずっと気になっていたことを声にかけてみることにしました。つまり、「ちかみち」ってどこへの近道？」ということ。声は答えました。「いききたいところ」行きたいところねえ……。僕はその時ようやく思い出しました。今日が推しのポスターの発売日ということに。思わず馬鹿デカ声で叫び散らかすところでした。危ない危ない……。

ってエー！ あれ！？ 僕さっきまで様子おかしくなかった！？ 門入ってから何かテンション低いし、無駄にシリアスになってたし、こういう所では「やるなと言われたことはやるな」という鉄則があるとはいえ、声の言う事にホイホイ従いすぎでは？ 一人称も使ってなかったし！（皆は気づけたかな？）思い返せば「自分を持たない奴は何かに取って代わられる」って言われて、動揺を見せないように行動を制限してたけど、人の言う事に疑いもせず従ってロボットみたいになってるほうが「自分」持ってなくない！？ ナニコレ風刺？ 現代人への風刺！？ ……あれ？ ということはここまで僕を思

い通りに動かして、狭い脇道に誘導してきた「声」の狙いって……。

その後はよく覚えてないんですが、道の両脇から色々たくさんのが出てきまして……全力ダッシュで元来た道に戻りました。「色々」が何かって？ あんまり思い出したいくないですね。体が魚っぽくて頭は猿の何かとか、ゼリーみたいにくっついて金棒持つてるのとか、耳に潜り込めそうなくらい細くて長い蛇とか、とにかく物理的にこちらを食い物にしてきそうなのから、精神乗っ取ってきそうなのまで色々いました。それが追い掛けてきて、「避け道」から出たところで石畳の道の方からも同じようなのが大量にこちらに向かってきてたんで、白砂利の、神様の道の方に走りました。さっき祟りが怖いと言いましたが、もう全然大丈夫でした。キモイ化け物千体にやられるより神罰の方がマシ。まだ悪い神様って決まったわけじゃないし！ そんで白砂利を踏みしめまくって白木の門の方に走りました。白砂利の道に入った段階で3分の1ぐらいの化け物が蒸発しました。やっぱ神様ってスゲー！ もう帰ったら神社行きまくってお守り買いまくろうと決めました。もう3分の1は躊躇して追ってこず、残りの3分の1はタフなようで蒸発せずに追い掛けてきました。さっきまで頭の中で話しかけていた声はいまや「ソツチイクナ！ トマレ！」とキンキン声で叫んでき

ていました。なんやねん！ さつき「いくな」って言ったのは僕のためじゃなくてお前が行きたくなかったからかい！ とか内心ブチ切れながら、ガン無視しました。そして遂に門に辿り着き、渾身の力で扉を開けて中に飛び込みました。扉を潜った瞬間、頭の上の方から「ギャッ」という声が聞こえて、耳から何かが抜け出る感触がしたのですが……。えつ、あれって「直接脳内に語り掛ける」系じゃなくて有線イヤホン系なんだろうと思いました。何が入っていたのか想像するのもキモすぎるので深く考えないでおきます。そして、なんとか目を開けるとそこは……推しのグッズ販売店の目の前でした。今まで体感2時間近く彷徨っていたにも関わらず、スマホ（電源ついた！）を見てみると時刻は未だ8時30分過ぎ。お店の前に並んでいるお客さんもそれほど多くありません。これは……ポスターいけるのでは！？ 僕はそれまでのことを一旦忘れて嬉々として列に並びました。ポスターは無事ゲットできましたよ！ 中々ハードな体験しちゃいましたけど、結果的に推しのポスターが手に入ったので、全部オッケーです！

（その後推しの布教話が続く）

・「旧ど〇でもドア」について…追記

今回の証言者は「旧ど〇でもドア」本体に遭遇する以前に何かしらの異空間に迷い込んでいる。「旧ど〇でもドア」を視認し

てからは周囲を探索しても必ず対象の前に戻ってきてしまうという点から、「旧ど〇でもドア」は「どこかに行きたい」という欲望を強く持った人間を誘い込み、扉を開くように誘導していると考えられる。また、扉を潜った際に頭の中に聞こえてくるといいう「声」は、言葉巧みに証言者を言いくるめており、高い知性を感じさせる。また、「声」の言葉に疑いを持つていなかったという証言から、「声」は人間を催眠状態にする能力を持つ可能性が高い。今回の証言者は「避け道」の途中で正気に戻ったことで「声」の仲間であろう怪異たちに襲われ、奇跡的に逃げ切ることができたが、そのまま道を進んでいたらどうなっていたのだろうか。「最後に扉を潜る際に何かが耳から抜けた感触がした」という証言から、「声」は実体を持つ怪異であることがわかった。「旧ど〇でもドア」に遭遇した場合、耳栓をすることも一つの対処法となるだろう。加えて、「神様の道」と呼ばれる白砂利の道と、実際に証言者が遭遇した「神らしき一行」の正体については、未だ調査中である。専門家の意見では、「旧ど〇でもドア」は元々神霊が人の世を騒がせずに移動するためのものであったが、「どこかに行きたい」という神以上に強い欲望を持つ人間が稀に迷い込むことがあるのではないか、ということであった。「旧ど〇でもドア」内に巣くう怪異たちは強い力を持つ神霊たちにとっては無害でも、一介の人間にとっては危険なのだろう。とはいえ、本来聖なる通り道であるはずの「旧ど

○でもドア」内に怪異が発生するというのもおかしい話である。今回証言者が遭遇した怪異たちはどこから来たのだろうか。もし証言者と同じ人間が「旧ど○でもドア」に遭遇し、そこで神霊と鉢合わせてしまったとしたら？ 証言者は「神の崇り」を恐れていたが、崇りを行う神は決して少なくない。まして、自身を偶然とはいえ阻んだとなれば……。『声』が白砂利の道を「かみさまのみち」だと知っていたのは何故か……昔自分もそこを通ったからではないか？ 獣道のように作られた「避け道」を作ったのは誰なのか。そしてその奥には一体何があるのか。証言者を追ってきた怪異たちは本当に悪意あるものだったのか……。『旧ど○でもドア』の謎は尽きない。

〈今回の教訓…目覚ましで起きられるようにしましょう。〉

断捨離日和

宵蘭

世界にはわたし一人で良くなって断捨離日和と名付けてみよう

この写真何だったけまあいいや思い出せない思い出ないね

筆箱は要らないシャーペン一本でまだまだいける不自由をくれ

爪欠けてスマホの感度うすら落つ今日から短くしてもいいかな

これは要る？あれは要らないそれいらない困ることって少ないらしい

（結局は踏みとどまれる程度しか捨てれてないから当たり前だろ）

何一つ足りないものは無いけれど、そうだなアイスで埋めておいたら？

わたくしは餌やり禁止のヒト科です責任なんて取れないでしょう

あなたの手相を見せてほしい

午睡乃 ユメ

すっぱり収まる茶碗が欲しい
器用に動ける箸が欲しい
隣人に貰った漬物を置ける小皿が欲しい
軽く持ち上げられる汁椀が欲しい
なんでもいいから湯呑みが欲しい
並んだゴッホの椅子が欲しい
古色の表れた四角い机が欲しい
何もかも触ってみないと分からないから
まずはあなたの手相を見せてほしい

かじかみ

午睡乃 ユメ

声が乗る電波よ雲の道に沿って
私のカンバスに横たわれ
ピアノの演奏がブツブツと言う
雪のつもる音を求めて
ノイズまみれのラジオを聞いて
私はスケッチする

雪の中を人は歩くそうだ
足を取られてうんざりして

こんなところでは
照れたあなたの顔が分かりません
この町で恋はできませんと
悩む青年

雪を愛する私はどうなってしまうのでしょうか

こんなに寒くてはペンが持てません
雪景色という小説しか書けませんと
嘆く文士

ひっきりなしの雪ザアザアとは言わないのでしょうか

完成した絵を見た空が

もしこの絵を見て笑うなら
空には耳が付いてないのだと
いちやもんつけて帰るだけだ

光さえもが吸収されて

人が生む音は地べたに落ちる
雪の擦れる音や着地した音は
そんなの聞こえるはずないと
霜焼けのあるあなた達は

雪解けの日を待つのだろうか

雪で埋もれた道を通るより早く

空から届く悠悠とした雪が好きだ
損をしたとつい恨めしく手紙を書くあなた達は
ひと足早く春めくこの町を
かえって愛してくれるのだろうか

一味唐辛子、フリスク、それからウオッカをぎゅつと飲んで指で舌の奥をカチツとなるまで押します。

空振り空振り、肩までがちがちに力入っているからね痛いの好きじゃないんだ。だから赤ボールペンで血管をなぞります。こそばゆい……痛いぞ針でなぞってました。白いケロイドボコつてデコつて3、2、1。パチリいいねが三つ。

夕方に買い物に行ったのがまずかった。雀が羽を膨らませ、レジ袋からはみ出したねぎを支えようと左手で抑えたとき僕は一步も動けなくなった。こんなことならずっと家の中でスマホを見ておくんだった。カーテンから差し込む光よりもスマホから放たれる光のほうがずっと強くなってから初めて時間の経過を気づく。広告の間だけ息を付けてそのあとクラクラして立てないままにまたスマホを見ている。そんな現実から切り離されている感覚を求めている。

食事もなくして生きる必要もないなら俺でも一人で眠れる。明日を数えるにも秒気になる。やる気って靈感と同じでそこにある

って言われてもないものはない。

すこしカピている部分を切り落とす。放っていたトマト。磨り下ろす。まだ食べられる。白い壁にトマトの汁が赤く飛び散る。でもそれは赤じゃない。今搾っているきれいなちやつぷのうおうなあkじゃない。でももうどんな色か忘れてしまった。もうふき取ってしまった。

書くものがない。乗り換え前のホーム。腹の満たされた感はない。満たされた感とよく似ているから常に何か口にしてないといけない。バットマンの元ネタは宮本武蔵だと伝えるとすぐにスマホで確認しようとする。それだけで距離を感じて僕は話すのすぐ拗ねます。だったら僕が話すのがもったいないじゃない。

寝るときに目をつむると胸にぽっかりと穴が開いた気がする。より正確に言えば私の胸の前に何もない感覚が空っぽの腕が宙にぽっかり浮かんでいる気がする。それは抱きしめるべき人間がいないからだ。しょうがないから自分を抱きしめ今日もよく頑張りましたと口にする。

今日は救われた。飴をもらった。イチゴ味をねだった。イチゴ好きだ。甘くて赤ちゃんみたい。丸っこいのにくろくろ転がっ

ていけないし。そうそう一口じゃ食べきれないところとか。でも詩を読んでもただじゃイチゴは毎日買えない。好きになるのっていつもつがいなんだよな。花ってなんだか媚びてくるみたいで近寄りがたい。違うよ、美しさにこっぴどく打ちのめされて腰が引けるからだよ。

空

犧 まい

空がみたい。ホントウの空が見たい。街の明かりで星も見れぬような空ではなくて、かげぼうしがそっくり写るような空ではなくて。亡くなった人が昇っていくような、桜の葉の間から覗けるような空が見たい。そんな空は地上からではなくて、天から落ちるときにしかきつと見れない。

あとがき (作品掲載順)

宵蘭

満月を見た翌朝に月食を知るような人そんな人生

明倉有斗

半年後にしたい髪型とか分かるわけないじゃん

日々規

コンビニとかでもらうアイス用の木のスプーンって使にくい。もらったら使うけどGOLは下がってる。

霧雨 蒼

部外の人に読んでももらえるって最高に嬉しい！

CANMAKE TOKYO ♪

酒匂ちひろ

自己開示から逃げちゃいけない

矮小

あなたが面白いと思ってくれること。それだけを追い求めている。

くりや

長野なう二度とやらんさすがに

長岡 雅也

パプリカゆずは

カール

世界観を考える時間が一番楽しい

うちの先祖絶対百姓

序盤で文章広げまくったせいで完結できなくなる癖やめたい

午睡乃 ユメ

セルフプレゼンテーション

犧 まい

自分を確かめる行為

編集後記

わゐん

文芸部セピア

名前に合わない原色のような部員達が混ざり合い
深い深い瑠璃色を作ります

それは静かに私達を沈める夜の海で

それは腕を伸ばしたら引き千切られる空の夜で

みんなより少しだけ

書かないと生きていけない

そんな彼らが

散りばめたパイライトは

いかがでしたか

ここまで読んでくださった皆様

寄稿してくださった皆様

ありがとうございます

これからも文芸部セピアをよろしく願います

ラピスラズリ

2025 紫熊号

【発行日】2025年9月21日

【発行者】文芸部

【本誌使用写真】部員撮影

☆文芸部(旧文芸サークルセピア)☆

【活動日】毎週月・金 18:30~20:00

【活動場所】全学教育棟2階 C211教室

【X(旧Twitter)】@Sep_1A

【Instagram】@bungeisepia

※Zoomにて活動している場合もあります。

年に4回、『ラピスラズリ』(本誌)を発行しています。

毎週の部会では、部員の作品の批評会や、リレー小説、シャッフル短歌や俳句や言葉遊びなどのレクリエーションを行っています。

創作をやってみたい方は、小説・短歌・俳句・詩・絵本から評論まで、ジャンルフリーに募集中。

もちろん、自分では創作をやらない、一介の文学好きも大歓迎です。

「言葉について熱く語りたい」「好きな本についてまったり語りたい」「暇で仕方がないのでなにか面白い本を教えてください」.....あなたのそんな秘めたる望みが叶ったり、叶わなかったりします。

最新情報はX(旧Twitter)&Instagramにて公開中。質問等はDMで。

見学お待ちしております。

